

尾張名所圖會

附録

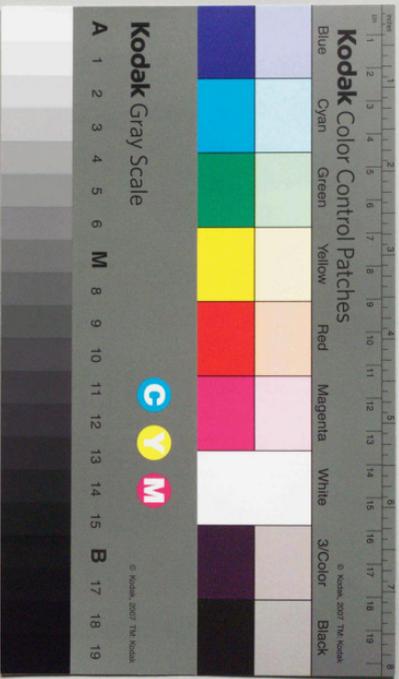
一

第壹十門 尾張名所
尾張名所圖會
尾張名所圖會
尾張名所圖會

尾張名所圖會
尾張名所圖會
尾張名所圖會
尾張名所圖會

尾張名所圖會
尾張名所圖會
尾張名所圖會
尾張名所圖會

第壹十門 尾張名所
尾張名所圖會
尾張名所圖會
尾張名所圖會





小治田真清水叙

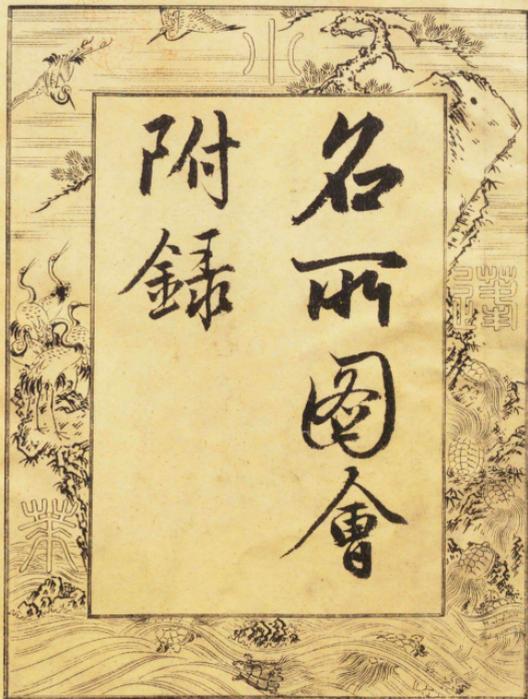
天保年間所出之尾張名

所苗會文園梅居二人之

同撰也刊行之日文園者不

慚於心者於是獨作為斯

編年曰小治田真清水廿



名所圖會

附錄

義蓋取於屠張田增水
之意云跗名所圖云以問
于世余也嘗聞之延喜中
貫之友則躬恒忠岩四人
奉

勅撰古今和歌集而後

功之日貫之別撰新撰和
歌集元久中通具有家
隆雅經定家五人奉

勅撰新古今集而落成之
日定家又特撰新勅撰集
不知文圖於斯編上效貫

之定家之為身書以叩文
園之魯壯兼告於覽斯
編人

嘉永六年歲在癸丑冬十

月之者

尾張百竹為深田精一併書

凡例

萬葉集以來古歌にありけり諸國ノ勝地とて名所と云ひたり一内
車既に久しく新古今集祝部成仲の歌ノ詞書に教長卿名所の歌も後
世傳々傳に云と見え又 順徳天皇此御時堪能の歌人にみこせり
るりりて國ノ景地百首此歌とて治は是を建保名所百首と名は
けたり和歌名所の通稱ハ其頃より始まりけんればい。て傳
風景多尺地とて歌にありけり所を名所と云ふべし。一内。然傳
小武百年以前より名所と俗地也混雜して。て。て。洛陽名所鑑江
戶名所記等も。近代諸國名所圖會何とて郷里山川名所普跡神祠
梵刹人物產物に至りて。今事も。て。其書名に惟名所ハ
みと表す事ハ頗る留意吉と。其傳習と今改めて益
む。て。依て。春江瑞齋梅居の三雅癖に我俗
癖を合せて。精一先生鼓舞の助を得て當國風土ノ圖

會と著りけりやして尾張名所國會と号けり也扱其國會前編
七冊後編五冊數年とて精密と尽すといへり又漏脱あり事あり
是をむづの遺憾といふ

○深田香實先生天保四年より 公命と奉りて國志と改撰せり
中尾義福と我も二人と又不肖自身あり 公命と下りて

彼撰書の補助とけりまうより同十五年ついに撰述成就一尾張志
六十卷小田切忠近の地圖に載納畢りてされば其項八郡の内
巡行も事ありて風去る時にも伺ひ知事と得より扱其天保
のより冬より筆記し置けり又故の中より御國にち事蹟も今古

此奇談怪說等と抄出して八巻とて 画圖を加つて小治田之真清
水と号く是則年異道之水のいさばら足筋のみを撰ぶる故也と
る名所國會に洩たふ事ばやうき集りては全く國會に拾遺り
たり真清水又増水とも聞えて名所國會の増補或ハ附録とも呼ぶ人

りハ前件の遺憾も暗向心地と幸ひなり

○此編全部八巻のうち愛智智多海東海西四郡五巻と初編として名
所國會に前編に准り中島羽栗春日井丹羽四郡三巻と二編として國
會の後編になり

○名所國會は詩文和歌狂歌俳句等古今といへ近世現存の人作
も多くろせけれと此編に百年以上の達人の作のみを撰りて近代
ものせはまれに述べの作を引出せ高とせられや其事實の

證跡とちんき詩歌発句等うてやむ事と得き信義と知信り
諸國ハ名所國會に尽りたれどもに書く所すくなくされと篠島日間
賀島とての國會にりれを信真景と數十箇所あり且奇談怪說の免
けりたつと描きて童蒙の玩覽に備ふりた多し其うち師長

公陳元寶とての画ハ名所國會にありといへり其趣はよくた
ひこに画りて師長公僧形の真とて一陳元寶の頭のみは實

に非人の風俗にて四十二國人物圖說等七繪によく合つりうふた
 ぐひすくぢくひ且亦清正朝臣の像野並に梅の如き由縁名所圖會
 ころふまは此編に惟画のみをらけ或ハ事實と畧抄く圖の上に
 書上付るも皆諸國名所圖會の拾遺附録等比例也
 ○神社寺院に持傳へる古文書とてこつてつゝくふは原書に字体
 何まも古雅く其姿を失ふるやに縮寫する事あり故
 小令様の書体に改め寫して其父義のみたかまふと要し諸君子
 是を足りて抄つて

文園 岡田 啓一 侍



小治田之真清水卷之一

目錄名古屋部

- | | | | |
|------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| 尾張國印の圖 | 鯉魚の古圖 | 古小判金の圖 | 尾張國の地理 |
| 蓬左基盤刺圖 | 小蓬菜の名義 | 柳生鐔来由圖 | 産物の品々 |
| 西鐵御門外 <small>同</small> | 天王坊後園圖 | 牛玉寶印 | 内府端の邊 <small>同</small> |
| 茶屋町 | 剛象通行 <small>同</small> | せり池 | 杉之町 <small>同起</small> |
| 櫻林舊趾 <small>同古</small> | 銀治政常 | 鶴重町 | 天蓋町舊趾 |
| 籠市 | 尖森庚申堂 | 白華園信阿墓 | 信長公作繪馬 |
| 安用寺 | 画像大達磨 <small>同</small> | 橘町 | 七寺 <small>林泉の圖</small> |
| 松原海道の跡 | 西小路妓樓跡 | 那古野孫五郎 | 盗人森 <small>同古</small> |
| 俳諧師横松 | 泰雲寺 <small>同</small> | 尼頭義次塚 <small>同</small> | 道場法師 <small>同故</small> |
| 御伊勢川 <small>同由</small> | 榎木町 | 大矢氏城跡 | 秋景權現堂 |
| 塩川伯耆守 | 土方河内守 | 忠孝堂 | 堀留 |

御園町

川村随見宅跡

醫學館試問同

長榮寺同

相應寺 洪鐘銘

陳元贊寓宅園

少子部連の墓

久遠寺

光蓮寺

道園屋鋪

晴明遷

四子出産の事

東序瑞蓮同

歌塚

善藏寺

梅屋寺

御蔭園同

七曲町

學館起源明倫堂同

稲島普請場跡

隆正寺

坊坂

九十軒町

遍照院

草詠女神の堂

大黒舞同中

辨才天社

觀音拜參の園

蔡師寺

法然寺

天道社

小牧町仇討同

汐見山

本住寺

園教寺

操芝居

埋藏發售日

尾張國印

天平二年大稅帳及六年正稅帳

集古十種曰

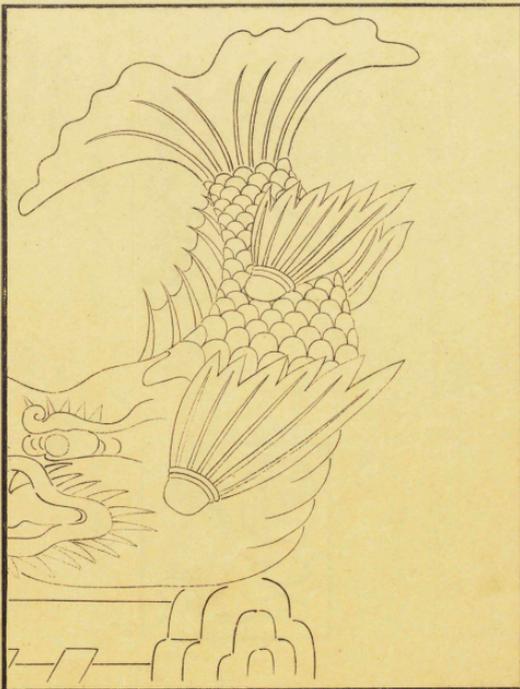
尾張國印

天長二年十月廿日尾張國司司藤原印



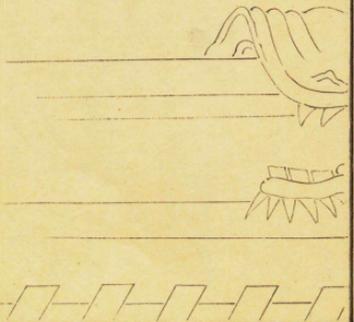
右兩様の古印ハ損一ヶ處にや貞觀に又新らしく鑄て當國司(臣)リ

キハ三代實録に貞觀二年四月廿五日乙新鑄印一面賜尾張國と尾ノナリ



全身量全

總高 九尺
 胴高 三尺
 胴廻り 七尺
 尾巾 六尺
 腰大 一尺 腰中腹
 幅 一尺 腰中腹
 下幅 一尺 腰中腹
 上幅 一尺 腰中腹
 尾巾 一尺 腰中腹
 肥後守殿御注文
 右表は口の土屋の土屋の注文
 一に足すなり



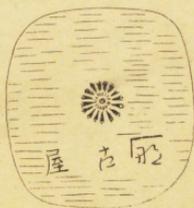
ともり人ハさうなき蛇トナカうらま
 ころのいふあふまてそ足新

一傳天宮の御道よりそまじりて
 流少流を此蛇はよてえしなり

金銀圖録

尾張國那古屋小判金

重廿四匁



同上津島小判金

重廿四匁
金位中ノ下



抑尾張國ハ往古より伊勢國中海川隔たりて陸路行へば舟を往来

安し以東國非常の警衛の備ふに便利に地勢を以て關所を置

て以て三關の國近江伊勢美濃と三關の國を以て上津坂等しく又太宰

府と異國の要害の爲に置けりと同例の舊制ありたり續日本紀

和銅元年三月丙子徙四位下佐伯宿祢太麻呂爲尾張守同月乙卯勅

太宰府帥大貳并三關及尾張守等始給僱仗其首帥八人大貳及尾張守

四人三關國守二人其考選軍力及公麻田並准史事と又之同紀及び類

聚國史に和銅二年九月己卯遣從五位下藤原朝臣房前于東海東山二

道檢察關則進省風俗仍賜伊勢守正五位下大宅朝臣金弓尾張守從四

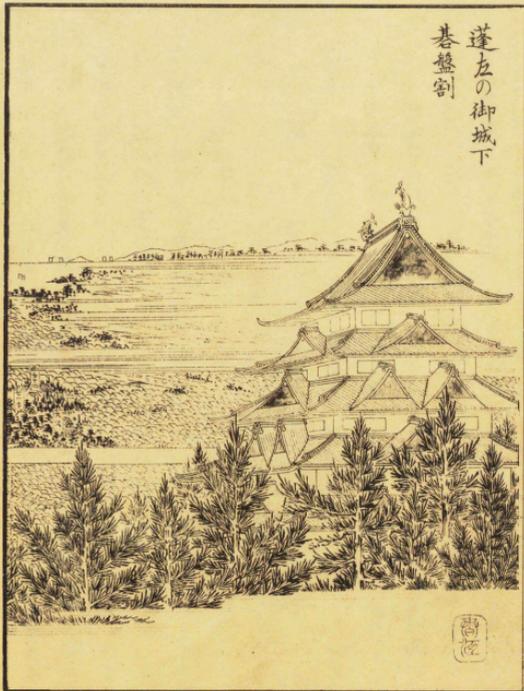
位下佐伯宿祢太麻呂近江守從四位下多治比真人水守美濃守從五位

上望朝臣麻呂當田各一十町穀二百斛衣一襲美其政績也と志内也

其凡德代と給ふハ容易く予を儀より甚稀かろと太宰大貳と同一

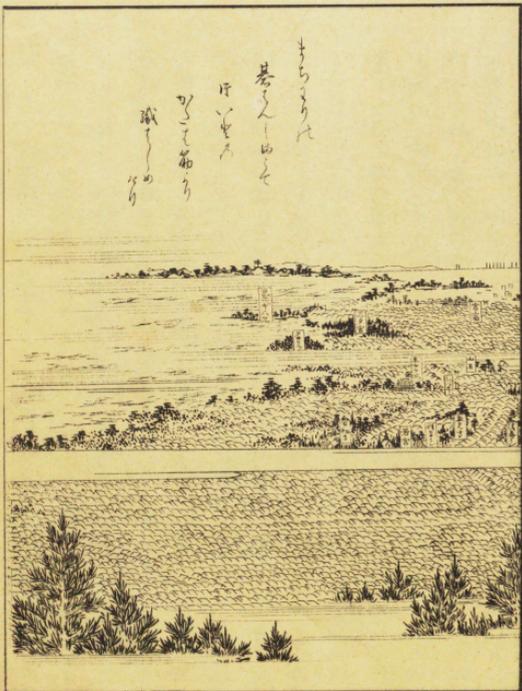
其負四人と尾張守に給ひ...に比地警固嚴重小傷へ

蓬左の御城下
 甚盤割



繪

もろちうりた
 甚盤割
 行いせり
 町にて如う
 職にての
 たり



公よて不度見稱しんせうよりの節あるよりしんせう其外地蔵ちゆうじやう美驗みけん記きよ元
 命朝臣尾張守にて悪業あくごうとなすなりい一い一いををらねる解文げぶんの赴き
 小くく合あひ一い經臣きやうしんの子こて女用防守源致にようぼうしゆんぢの女むすめなりなり志しちなり
 小蓬菜せうほうさいの名義なごうぎ梅華ばいけ無尺藏翰林五願集むじやくざうりんごんしゆ等にに入いれりり五山の学僧ござんがくそうも
 が詩文小尾張の替文字かへふじと蓬菜ほうさいとらにりりい蓬菜ほうさいととなりなりも
 多おほ心しん八はち往古わうこりの傳でん一いつ無田むでん地ちとよりよりだが島しまととががひひたりりに
 振ふるももりり神社しんじ若異わくい称せう日本傳にっぽんでんななととなりなり近代著撰てんたいしやくせんの數十部じゆしふの書しよも
 一いつ皆熱田なつたと蓬菜ほうさいと称せうするするい一いつつ其其地そのちの縁えん八はち發田はつたと龜かめの
 一いつららととて地脈ちまく長く北きたの方にはけけき名古屋なごやの御城地ごじやうぢとて縦横じゆうけい
 一いつらく一いつ國くにの岡おかやままて龜の脊せきののててくくままりり蓬菜ほうさいののちちちちゆゆれ
 一いつ故小御城こごじやうぢと蓬左城ほうさじやうぢと称せうし猪子石村しゆしよせむらの蓬菜洞ほうさいどうとて皆其地そのちに
 一いつたたなりなり南なんと龜の頭かめのかぶたに表あらわし北きたと龜の尾かめのび小准せうじゆんけけららや龜尾山かめおし天王社てんわうぢ
 一いつ龜尾天神社かめおしあまてんじんじや御城ごじやうぢの根廻りねまわりに鎮座ちんざししつりりけ龜形かめがたの丘かみ珠たまははるるく

とと那古野山なごのやまといいりり一いつ慶長十五年けichoごじごごねん引ひななりりて町並ちやうなみとと浮うりりよ
 一いつ今ハ蓬菜ほうさいののううちちももええんんはは其時そのときの童謡どうやうの音ねに聞きええ那古野なごのやの山のやま
 一いつととどどききややちちななりり一いつた肥後ひごの衆しゆののううちちもも一いつ是則すなはち御ごららもも外南げなんの正ただ
 一いつ面おもてりりて名古屋なごやの碁盤割ごばんわりとと一いつ内町うちまちとなりなりすすて碁盤割ごばんわりといいつ町造ちやうぞう
 一いつも諸國しよこくののと多く又日下ひげ舊聞きゆぶんといいつ異國いこくの書しよに大明門だいめいもん前碁盤天街ぜんごばんてんがい百
 一いつ貨雲集かうんしゆとて和漢わかんといいつ其例そのれいするする配はいううちちといいつととりりきき
 一いつ當御城下ごじやうぢげなりなり其地そのち廣ひろく四方しやうほう低ひりりて中央ちゆうやう高く平垣へいげんななばばままり
 一いつ棋盤ごばんと居いるるも其上そのかみに目めと盡じんりりたた如ごとく縦横じゆうけいの條理じやうりの正ただ一いつきき
 一いつ世よにののげげききなりなりび岡山おかやまの吳地ごちととなりなりて豊田とよたと蓬菜ほうさいと称せう
 一いつ尾張おわりの國名くになと及およびびて小蓬菜せうほうさいといいつ三字さんじと設たげげたたりりなな
 一いつるる古来こらいより蓬菜ほうさいと尾張おわりの地ちとて作りつくりりたる古詩古文こしこぶん甚多しんたなりなり
 一いつと證據とどけののおもに抄出しやうしゆりりてままにちちりり事左ことひだりののてて



柳生鋸の来由



江表韻集

遠守古院被秋催岸上抹松聽戶開瀟瀟浪紅鋪落葉遠階嵐綠拂寒苔
孤舟棹影穿烟去晚寺鐘聲澆水來此地卜鄰非俗境龜山便是小蓬萊

蘭坡

南嶺寺文
龜山中寂

翰林五言集

寄尾之中谷侍者
秋風取別意無寐夜；數殘官寺鐘聲作蓬萊都水藍紅輝霜葉碧霜松

次句寄尾陽人

村巷

一躡仙蹤采藥人問懷望幾朝群近來欲問徐郎信雲傍蓬萊海上飛

寄尾陽故人

同

海山佳處是君鄉咫尺仙家日月長却恐蓬萊水清淺麻姑西鬢也應霜

亘竹

相國寺舊
永年中人

此去君家到者稀風塵京洛滌人衣笑吾一念五丁力欲到蓬萊夜半飯

招竹圃留滯尾陽

同

默數天涯三日程秋風攪唾出都城離愁如海思君夜應是蓬萊涯又清

寄尾州殊伯

瑞岩

莫道蓬萊非世間東遊今日待君還安期若授長生術寄與刀圭慰暮顏

送人歸尾陽

同

却老無方暮髮明塵中落拓歲崢嶸蓬萊到日有回使分我紫芝三四莖

送慶甫老人之尾州

同

客舍長安歲月仙遊万里憶蓬萊離愁可忍雲飛夕踈柳無枝只折梅

蓬萊有二美少年其諱曰齊粟性聰利嗜學攷；人命曰洞上異

苗也癸巳孟春之初溘然而逝矣先音山田郎
先音寺義溪侍者平素講

忘年之交以故介其逝云云因賦一章奉呈義溪侍者助哀云

天隱

建仁寺文
明年中人

蓬萊聞說是仙洲豈謂令狐短世悲花笑鳥歌春未半風吹暮樹雨知秋

桂蓬萊香

明應二年
丑正月六日

万里

葦原鄉有小蓬萊祀子祠堂春蝕苔若對御前錄沈水長生連理定香材

花後遊天寧

余寓尾州又遊天
寧天寧看石亭

同

舊入蓬州鞋踏煙飯未綠暗石亭前去不見今春又可恨花無半日綠

日本蓬萊尾陽太守野州賢君去歲冬之季純之觸微疾身在床

褥廣洛著域扁域相聚竭匡力難然絳雲丹飛霜散亦曾不能治

之君之性命既是懸絳耳膺此辰從卒安將國家氏族無貴無賤

流悲法云云就中一家棟梁小笠原城門即忠重公不二厥心欲

重履於君者必矣嗚呼忠哉孝哉一日不勝悲之云云天夫感之

乎忽平復如本云云忠重公孝心天下無其隱兒童誦之走卒

知之云云感歎之餘整記一篇云云以寄城門即足下云

銖 山 名宗純元 和年中殿

山林風日集

聞說重君輕二命忠臣天下不公誰洛陽万里蕪無履花亦知名鳥亦知

遊尾之小蓬萊護海筆記詩蓋插古真人之所謂杖頭雲水三千

累身重蓬萊十二樓之句論世人區々之患陋云藤欽夫

恒留文集

世間榮達眼中埃方外真遊心上仄弱水誰言三萬里不知身重有蓬萊

寬永中子紀行 是夕雨降到翌朝 三月二十五日發田宮

林羅山

執田日本小蓬萊道士曾尋妃子來神託製花似留客一枝帶雨落還開

右二百五十年以徃乃數首の詩うねり以藜田のみと蓬萊とすゆに石

ら以小蓬萊のうらひ蓬州とかけらひに國号の雅名と知るべし

産物ろ品、○吳服物 尾張うてゑりめて綾錦と織り留り車續日

本紀の和銅五年七月の条に又之延喜乃主計式に尾張國より冠羅蕃

薇綾等ろ品と貢獻せりふし志はちちらハ綾羅錦繡の上品なる物也

其以下の絹布絲綿糸と當國よりきてまつりて六國史とて之を延

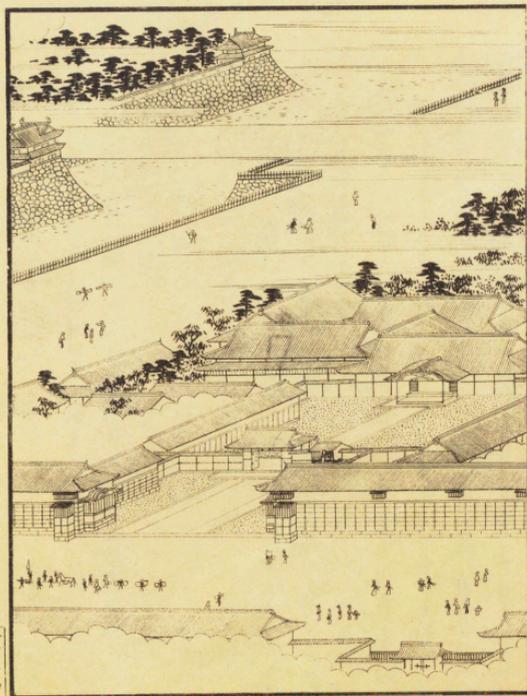
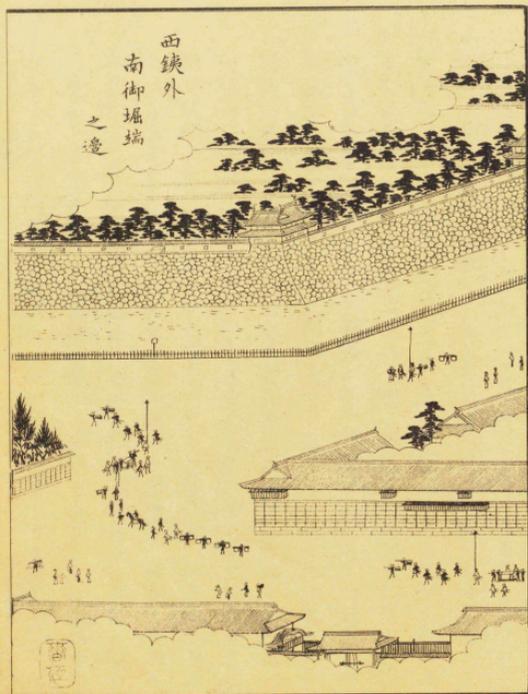
喜式江家次第等數十部ハ古書小足えくはちけて尽しつゝ絹布此

國産珠に多々れやむうハ品類少く長絹白絹八丈絹細疊糸も付

四五種のみなり令名古屋町ハ此吳服屋太物屋にて賣買する絹布ハ

其種類甚多して彼いふハよは百倍たり又木綿問屋ハ國産の白木

綿繙織木綿糸と他に賣渡す是と諸國よりて尾張もゆんと採り彼天下

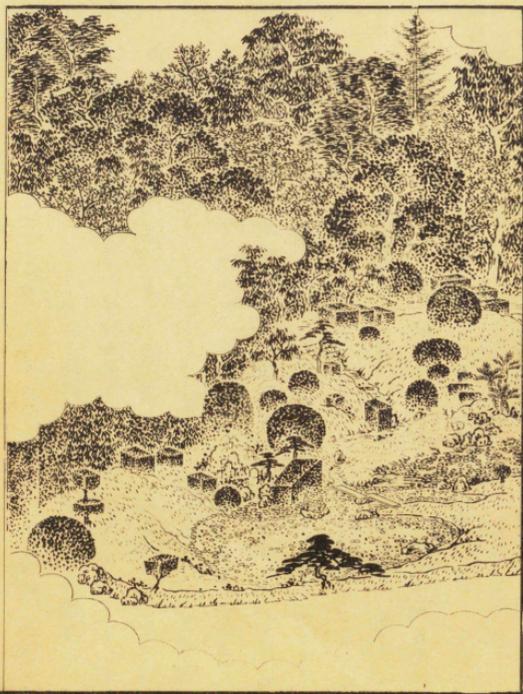


小名高と河内木綿真同木綿結城木綿等よりなる名産あり
○武器の類 延喜式兵部省諸兵器伏のうちには尾張国甲六領横刀十
六口弓四十張 征箭五十具 胡箭五十具 中百ふ如く 往古より代國製
の是て今猶とれらる職人甚多し尾張胴はまじふく堅實なり世に
桶がハ胴と稱す木下藤吉即達江乃松下某へ僕たり一時主人の所
ら、めて桶がハ胴と買求めに尾張より來り其代金をもて織田家の扶
持人に抱られて終に遠州よりぬらず主人松下に不實の無沙汰に乃
といひ傳へる名器今猶其職人ありて明珍と名のれり其外馬具
屋を數十家あり鉄炮張、芝辻国友等の數家皆良工なり 鍔鐔ハ柳
生鐔と名物ハ装剣奇賞に尾州小柳生鐔と稱す往日柳生某といふ
術者の好むを數十枚乃鐔ときたしを是と白に入て力にまさり留て
けり其破き毀へる物と除き站なき物を撰び用りといひ傳へる
ふと或士よりくわと價を惜まは是と求められし其名やりにく

て競ふて是と賞し今名古屋と名行と上方より其子といふ
多くきこえ候と云ふもの 其外山吉戸田等ハ尾張鐔ハ萬寶金書小足
述世と上工ありて日置けと稱すハ其製作すべれたり其餘の諸
品名古屋にて製作せざる物ナリ刀劍ハ珠更をくんと後乃別奈
小志乃寸合せハ一〇雜器 大小の釣鐘金燈籠佛像佛具ハ
類鍋釜茶道具等よりくれば銅器鉄器の鑄物師ハ鍋屋町に数家あり
高水野氏といふ者殊に舊工なり簞笥長持襖衝立戸障子膳梳箱類
塗物彫物の細工雜人形曹人形扇子造花硝子細工錫引等に至る迄
百工諸職ハ名人手と尽し堅實精密ハ製造目と驚かりてりこねま
り間屋ありて集めて諸國に運漕は佛檀造ハ七間町筋に多し其制作
木品と撰ひ細密ハ彫物手と尽し堅地の漆塗に黄金の箔と多く甚
なる板金と振ふに至り其價の貴き押しはるる遠碧軒記に
禁中の黒戸に御佛檀の繪所の若子澤一園に蓮華とかく本尊は

名古屋造りと北葦（北葦）や称（北葦）南都及び有馬（有馬）の仕入葦（有馬）はまゝに
事遠（事遠）一（事遠）まんとり（事遠）ひの高（事遠）はう（事遠）ぶ（事遠）延喜式齋宮寮諸国調庸雜
物のうち又民部省年料別貢雜物のうちに葦尾張一百管（葦尾張）と志（葦尾張）はせり
ぬ（葦尾張）りき産物なり 元結水引紙煙草（元結水引紙煙草）入等（元結水引紙煙草）、中下押切栄町（元結水引紙煙草）もよく造り
車（元結水引紙煙草）影（元結水引紙煙草）はく遠国に運送（元結水引紙煙草）も莫（元結水引紙煙草）太（元結水引紙煙草）なり 晴雨（元結水引紙煙草）の用具笠縫（元結水引紙煙草）傘張
草履（元結水引紙煙草）木履造等の諸職人良工多く婦人の足駄類（元結水引紙煙草）、漆塗（元結水引紙煙草）に天鷲織（元結水引紙煙草）
ふ（元結水引紙煙草）ひ、真田組（元結水引紙煙草）なれ緒（元結水引紙煙草）とつけ善美（元結水引紙煙草）とげく（元結水引紙煙草）ひ（元結水引紙煙草）三都の仕入（元結水引紙煙草）に同一海
人藻芥（元結水引紙煙草）に塗足（元結水引紙煙草）准（元結水引紙煙草）准（元結水引紙煙草）仍（元結水引紙煙草）入用之（元結水引紙煙草）とえく長門本平家物語（元結水引紙煙草）に南（元結水引紙煙草）越（元結水引紙煙草）の大
衆（元結水引紙煙草）、わ（元結水引紙煙草）り（元結水引紙煙草）り（元結水引紙煙草）た（元結水引紙煙草）小歌（元結水引紙煙草）と（元結水引紙煙草）う（元結水引紙煙草）ま（元結水引紙煙草）て山門（元結水引紙煙草）へ送（元結水引紙煙草）り（元結水引紙煙草）り（元結水引紙煙草）な（元結水引紙煙草）を（元結水引紙煙草）志（元結水引紙煙草）し（元結水引紙煙草）て（元結水引紙煙草）歴（元結水引紙煙草）
乃官僧（元結水引紙煙草）な（元結水引紙煙草）り（元結水引紙煙草）も（元結水引紙煙草）准（元結水引紙煙草）してよく物（元結水引紙煙草）を（元結水引紙煙草）買（元結水引紙煙草）ひ（元結水引紙煙草）て（元結水引紙煙草）延年（元結水引紙煙草）、賤婦（元結水引紙煙草）の日用の料と
次古今（元結水引紙煙草）の変改（元結水引紙煙草）と知る（元結水引紙煙草）べし ○飲食（元結水引紙煙草）の類 酒（元結水引紙煙草）、御城下（元結水引紙煙草）及び智多郡（元結水引紙煙草）の
造酒影（元結水引紙煙草）、く其餘（元結水引紙煙草）の諸郡（元結水引紙煙草）も（元結水引紙煙草）多く（元結水引紙煙草）なり（元結水引紙煙草）て（元結水引紙煙草）も（元結水引紙煙草）ん（元結水引紙煙草）く（元結水引紙煙草）摸寄（元結水引紙煙草）る他國（元結水引紙煙草）へ
送（元結水引紙煙草）り（元結水引紙煙草）塩尻（元結水引紙煙草）に去元禄十五年（元結水引紙煙草）關東（元結水引紙煙草）乃仰（元結水引紙煙草）に（元結水引紙煙草）より（元結水引紙煙草）て諸國（元結水引紙煙草）醸酒（元結水引紙煙草）の斛（元結水引紙煙草）數（元結水引紙煙草）を記（元結水引紙煙草）す

一（尾張）七封内（尾張）領内（尾張）の神（尾張）辛（尾張）巳（尾張）酌家の耐酒（尾張）通計（尾張）十一萬四千九百六十石餘（尾張）壬
午（尾張）の通計（尾張）八万四千零七石餘（尾張）是壬午五月（尾張）所録（尾張）なり（尾張）これ（尾張）京師（尾張）南（尾張）越（尾張）難
波（尾張）、す（尾張）く（尾張）い（尾張）こ（尾張）、諸所（尾張）の都會（尾張）と記（尾張）り（尾張）り（尾張）ハ左（尾張）、右（尾張）、多（尾張）り（尾張）なり（尾張）む
宜（尾張）哉（尾張）半（尾張）と（尾張）減（尾張）り（尾張）て（尾張）釀（尾張）す（尾張）べき（尾張）よ（尾張）令（尾張）、強（尾張）ひ（尾張）り（尾張）と志（尾張）はせ（尾張）ら（尾張）い（尾張）中古（尾張）以
來（尾張）の事（尾張）之（尾張）往（尾張）古（尾張）猶（尾張）す（尾張）く（尾張）わ（尾張）ら（尾張）い（尾張）延喜式（尾張）及び伊勢太神宮（尾張）の古記録（尾張）とも
小尾張酒（尾張）貢進（尾張）の事（尾張）を（尾張）り（尾張）て（尾張）天文十三年（尾張）宗牧（尾張）、東國紀行（尾張）の
三河國（尾張）新城（尾張）の菅沼氏（尾張）に旅宿（尾張）せ（尾張）、条（尾張）に旅宿（尾張）しても別（尾張）の如（尾張）き（尾張）と（尾張）と（尾張）く
數寄（尾張）の座（尾張）交（尾張）へ（尾張）む（尾張）こ（尾張）く（尾張）なる旅（尾張）の具（尾張）とも（尾張）こ（尾張）ハセ（尾張）や（尾張）う（尾張）て風呂（尾張）ヲ食（尾張）ら（尾張）
ぬ雁（尾張）の（尾張）孫（尾張）の料理（尾張）尾州造（尾張）りの名酒（尾張）路次（尾張）不通（尾張）の時（尾張）分（尾張）奇特（尾張）の（尾張）り（尾張）なり（尾張）と
こ（尾張）う（尾張）け（尾張）ら（尾張）る（尾張）よ（尾張）て（尾張）尾張酒（尾張）の（尾張）り（尾張）き（尾張）と知（尾張）る（尾張）べし 赤味（尾張）嗜（尾張）是（尾張）ま（尾張）く（尾張）甚（尾張）多（尾張）し
大豆（尾張）を焚（尾張）に造（尾張）り（尾張）た（尾張）り（尾張）て年月（尾張）と多く（尾張）経（尾張）過（尾張）と（尾張）う（尾張）ら（尾張）い（尾張）故（尾張）に其色（尾張）赤（尾張）
変（尾張）り（尾張）或（尾張）ハ紫色（尾張）と（尾張）なる溜（尾張）と（尾張）り（尾張）て其味（尾張）ハ殊（尾張）に厚（尾張）し是（尾張）と他國（尾張）と（尾張）ハ
尾州（尾張）乃（尾張）ぞ（尾張）と新（尾張）猿（尾張）樂（尾張）記（尾張）に河内味（尾張）嗜（尾張）と名物（尾張）と古令（尾張）著聞（尾張）菓下（尾張）學集（尾張）



天王坊
後園



香徑

等に南都の法論味噌らず。味噌の事、七十一番、聆人歌合、小
とわ、ろ、み、ぢ、う、ま、と、み、如く諸國に名物の味噌多けれど、其
製法薄うて味ひ厚うて、次獨り尾州味噌の、陳舊の仕入、て強塩
たれ、バ、ロ、は、あ、ま、ん、十、安、う、ね、食、喇、れ、胸、腸、を、む、り、き、滋、補
り、功、能、等、他、國、製、に、ま、り、ま、り、を、葉、種、ハ、延、喜、式、典、茶、寮、諸、國、貢、進
年、料、雜、茶、の、う、ち、に、尾、張、國、四、十、六、種、の、を、て、諸、國、の、貢、進、に、引、く、る、ふ
ま、は、品、類、甚、多、く、其、う、ち、に、ハ、昔、茶、廿、二、斤、前、胡、廿、斤、干、地、黃、四、升、桃
子、四、斗、な、や、斤、目、舞、目、の、多、き、物、も、あ、り、て、惣、計、夥、し、き、茶、種、と、り
む、う、朝、廷、に、て、尾、州、産、の、茶、品、を、用、ひ、後、り、る、専、ら、め、り、一、丸、之
然、尙、に、今、名、古、屋、の、茶、屋、屋、も、賣、所、の、品、及、び、医、家、に、用、向、処、す、て
唐、物、と、し、め、靈、藏、の、品、及、び、和、國、の、産、も、遠、國、他、國、と、い、も、と、名、産、功
能、の、物、と、の、み、撰、び、て、尾、張、産、の、品、と、目、付、る、至、多、少、な、一、實、に、古
制、に、た、り、と、い、ふ、一、

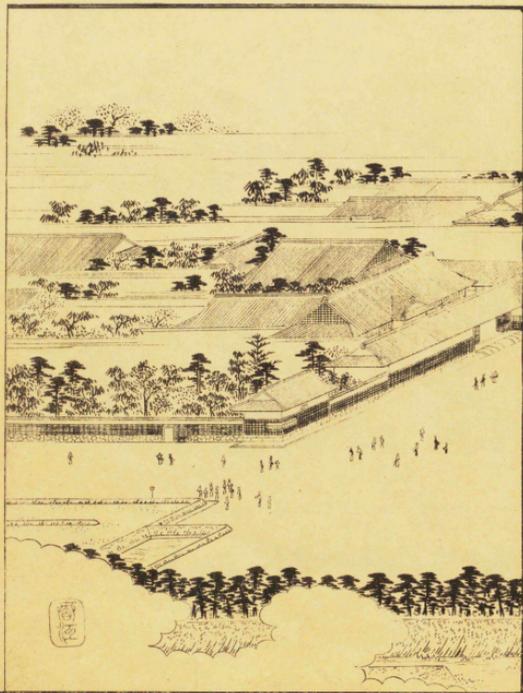
西鉄御門外邊

今川氏豊の居城の時も此邊に大手門あり

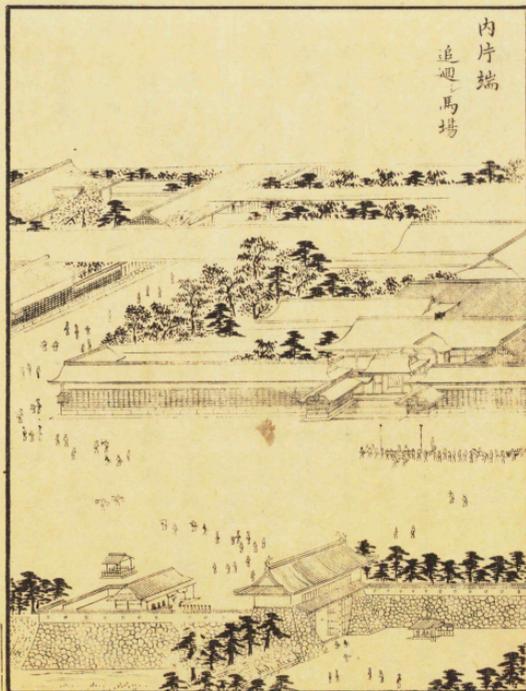
牛王寶印

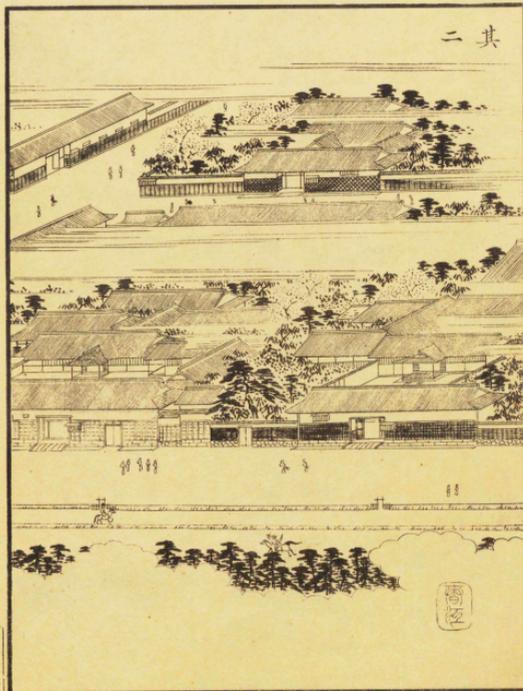
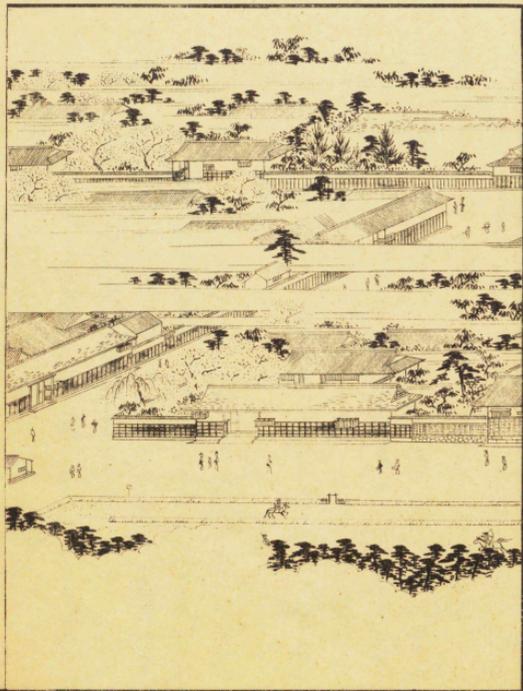
三之九天王乃生王守護の神符、紀伊國熊野の牛王と稱じ

起請文の罰文と云々、む、白、料、木、に、入、用、此、時、ハ、天、王、坊、南、の、坊、に
て、授、け、り、請、く、閑、室、瑣、談、に、牛、王、ハ、ハ、セ、ウ、ハ、す、神、の、守、符、の、上、包、に、生
土、と、う、き、た、生、の、字、に、下、り、一、畫、と、土、ハ、字、の、上、に、つ、け、て、人、の、や、り
そ、う、り、牛、王、と、ふ、名、ハ、出、来、し、も、う、土、に、お、り、け、し、と、熊、野、ハ、伊、弉
冊、尊、と、て、人、倫、を、も、と、く、生、土、の、御、神、と、稱、す、ハ、牛、頭、天、王、と、御、符、内
の、惣、生、土、の、御、神、と、れ、ハ、御、ま、り、し、出、心、も、お、も、ち、り、也、皆
人、思、ひ、の、さ、れ、い、も、牛、王、と、ハ、尊、稱、矣、威、は、は、ち、け、ち、く、た、事、を、
牛、王、經、牛、王、儀、軌、と、し、古、經、典、も、れ、れ、ハ、中、古、出、来、を、名、に、而
ら、び、閑、室、瑣、談、の、説、ハ、い、い、く、信、し、こ、う、其、う、ち、牛、王、生、土、と
同、い、う、ち、の、文、字、を、て、世、に、守、り、と、な、り、流、し、ハ、い、い、く、め、て、た、紀、奇



内片端
追廻馬場





高

遇なり因に天王坊後園の林泉と云に
一覽と云なり

内片端 むう今川氏豊居城の時ハ邊と今市場といひて高人の

家居と立伴ふ今之姿とは基たういふあり

茶屋町 御兵服所茶屋長以第宅ありて代々居住する故町の名也

以茶屋ハ中島氏江戸の御兵服所と同居ありて由緒れすれり
を世に如きとく王海集板行本 明暦二年のにを月の祭夕のうちに 茶屋と

よ人ののせよ

たづてらん代茶屋の望月歌

喜多氏
直能

と云り二百年以前もかく如く代々と稱していふ茶屋あり

一田家なるを和名一表門脇の物見長屋の結構ありと諸族

うこれ屋敷のこむり異國人或ハ異國の珍敷等 御城下通

行の時ハ高貴の御方御忍びて此長屋より御才見控ハされ

一と云又屋敷内に稻荷社あり毎年二月初午の日に北の門を開

きて諸人と参詣せむ遠近の人羣集して賑あり茶屋町ハ東の

長年中京の銀座後藏三郎通ひ所居し金銀と両替子両者數人

清須よりうけ住しあり此町の名す今ハ退轉して平田屋といふ

替屋町のこれり其東のつくち富原町も同時に清須の京町とつせり

又茶屋町の西の方大和町ハ御城御營業の時大工棟梁中井大和住り

御門近き本町の左右にありて御屋敷の最初に建れん此に御城内の親

馴象茶屋町通行の事 享保十三戌申年南京人來朝 廣南産産家

二頭北七歳と大船にのせ來り六月十九日長壽寺善寺乃唐人旅館

小到着に板關東へ率來れと公命と下り落り 此象食物相應せり

ふりにて長壽寺を病斃しければ此象一足と貢獻し翌十四日酉

年の春長壽寺を築し江戸に到り五月十五日此名古屋と通り

也象の性人乃高聲高笑いふに嫌ひ鐘太鼓亦乃音に驚き牛馬の形も

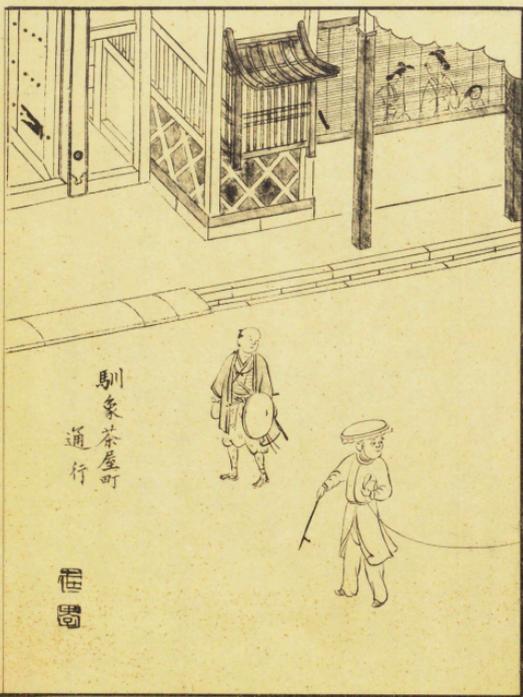
を恐れ甚怒り悩むりそれら此障りと速急し扱つたつ扱つて
中兼日御觸りりハ十三日起宿泊十四日稲葉宿の春清須宿

乃泊十五日宮宿の各池鯉鯽宿れ泊りまて路傍に牛馬とぞ置らひ
諸人いや静うに見物たりしを享保板判本に象志にこの牡象
七歳頭長廿二尺七寸鼻長三尺三寸背高五尺七寸胴圓一丈長七
尺四寸尾長三尺三寸と見え雄者兩長牙あり頭頰廻すなり口
ハ頰に隱れ運動重象と以て用ひ一軀乃力皆鼻にあり鼻端甚深
閑闊く物を取内中に小肉ありて夾み取る芥子粒といふも亦拾
ふ一毎に鼻と以て物を捲く喰ふちり飲水も亦鼻と以て捲く
象の性、人に馴れず使制すに必鉄の鉤を以て象奴其頭に跨り
鉤を以て使に進退前却自由となし云と云ふなり食物ハ芭蕉葉
竹の葉ホも喰ひしむ室町將軍の時異國より黑象と獻
るよりゆき元年代記にも見え若狭國今富名領主次第に應永
十五年六月廿二日に南蠻船着岸帝玉より日本の國王へ乃進物生
象一疋黒云云と云ふ又考亮宿祿日記に慶長二年丁酉七月廿九

日太閤有御上洛自大唐来象禁重江被懸御目云云世口洛中人も象見
物云と見え又のふ秘記に文化十年六月廿八日阿蘭陀船長等に着
岸小象と獻え長壽奉行遠山某台命と奉り本國に差戻りしと云ふ
よりより外は象と異國より獻進せし事希く誠に珍らしき壯
觀也いと云

抄めき 毎年四月十六日乃夜本町通奥店筋乃御祭礼前夜のまう
けと足むせんくと貴賤の羣集夥し元和の頃よりなりこゝ古習よて
其賑ひを俗にそのまきといふとめくハ騒くといふ古語なり袖中抄に
萬葉云まきすといは友の勝になくまきむ心とあらん我をうけしき
せめくハさハく飲もさう夫木抄に弘長元年中發御親王家百首
又うきもりやとけきハ合もこうととめかにマコねはしり
推僧正公朝と見えり

杉の町 本町二町目の南なり杉町なり 元名古屋の軒隔ハ南北へ通り



と云松林抄に阡陌以東西為縱阡以南北
為橫陌と云古制ハ及一たり
高岳院ノ門前より堀川まで其
長きノ東西半里に過たり又長塚筋より駿河町までの南北の武士
町と堅杉の町といふ是又甚長一其縱横の辻れ邊に富士淺間の社有
りて境内殊に多ク神木の老杉數十圍ありて世にゆづりき矣樹は
更々れハやく町名にと云ふありと松平君山ノ著書に御城御造
營の時以地淺野彦の普請場となりて假屋と建られりもさきより
りて彼大杉と依りけり谷と觸むとある者忽ち問絶て地小作
けきハ神慮に惜まを落しよとやと怪みりれやとて止むべきにあ
りたりハ御評議ありて淺間社と巾下に遷座し奉り杉ハ御役
ひになりよと云ふ志存せりすて當ハ杉樹の生ハ安んじ地ハ安んじ
即高屋村ノ大杉春日井郡内津村の堺杉同部田村の大杉ノ其外八郡
のうちハは名あり老杉野愛ありとも多ク松林とて合ハま
古事記にりて相津の二保杉もその代りありて今ハ御城の東北
ノ杉村といふ名あり或説に實平聖德太子にりて日本武尊
乃御脚に麻種敷手波里と云ふありよと云ふと云ハ真杉の普便て杉ノ尾張
の名物ト云枕詞によりたり

彼杉村ハ御普譜の料に用いらりたり一殘材の所とて其
是れ武家に持修神代の古杉と稱し器物に造らして歌山人の實
に古雅なる珍器なり當町本町の辻り西の方松町の白古衣類高ハ
華ハ江ノ新橋日影町淺草柳ノ子京五條鳥見建仁寺町
大坂難波橋高屋橋木の名と傳へる古手店に在りたり

龜岳櫻林舊趾

小椋町天満宮れりり收野と云ふ也 御遷有以

前ハ那古野山の裾野に龜岳山ノ松寺ありて其境内境外甚廣く大和
乃芳野に鬢髻なる椋林なり鎮守天満宮の社の側らに大樹と
云ふハ花の頂ハ見物の人多く中ハ不行義の昔なるとり
中足えて慶長四年九月九日清須の城主福島正則より遊山見物人乃
才めに制札と建られたりも其古制札と今に万松寺に所持せり
る珠古雅なり二百五十年以往の風俗と云ふも其箇條の
うちらに一當寺山内において殺生の事一見物敷當尺ハ并うい
の事一見物敷ハ弁當の事ハ云々なり三味線しく

伯耆守信高河村 信濃守貴道源 丹後守壽命藤原氏孫元 肥後守光代州名五郎

泰 名殺人をろせしり

鶴重町 むう 清須に住ける三左衛門といふ鍛冶太神宮と信仰し奉

慮く伊勢に参詣しつらつら伊勢御夢想に鶴重といふ名を授けり

小刀を作りて刃の上に鶴の紋を彫付たり其小刀名物とちりて世に

りてとやそれ住する新町といふ名も鶴重町と云はれり

と名慶長年中こゝに移りて元禄元年三月高貴の姫君の御名

にせりつりて本重町と改りて天保五年九月より旧名に復して鶴

重町と改る

天蓋町舊高趾 むう 本町と長者町との間に廣小路あり蒲焼町まで南

北小径ありぬきたら堅小路ありて旅宿屋町又天蓋町ともいひつり

て天蓋町といふ天冠 抱女屋居酒屋不建ち並いさ其也に扇風呂せいで

名高き銭湯などありて 四丁六丁は活湯といふなり 常に抱女絶つといひ

賑り と 淫地なり 兼 兼徳三年日蓮宗妙因寺の日命妙源寺の日順

妙長寺の日善等此地に抱女不法強氣のゆかまひ殺害るにたり

ら八月十四日彼三僧法衣を着し夜うら町中を引渡され磔り行

されのち抱女とてめられ万治三年正月焼失の後其町とを廢せ

らま と 其三寺ハ合猶法華寺町にありて法輪寺淨蓮寺照遠寺也

寺号を改り 編年大事及し樋口好古の著書に云ふ

雛市 玉屋町鑄炮町中須賀町大久保見町より二月廿日より三月

二日まで雛を賣る内裏雛空形雛童子形の裸人形お色・新様と工夫

男女の五人形居人形お色・種々核問とぞと錦繡の衣裳金銀

をちりてお色・お雛い人目と驚りて遠近の貴賤看集りて買求め

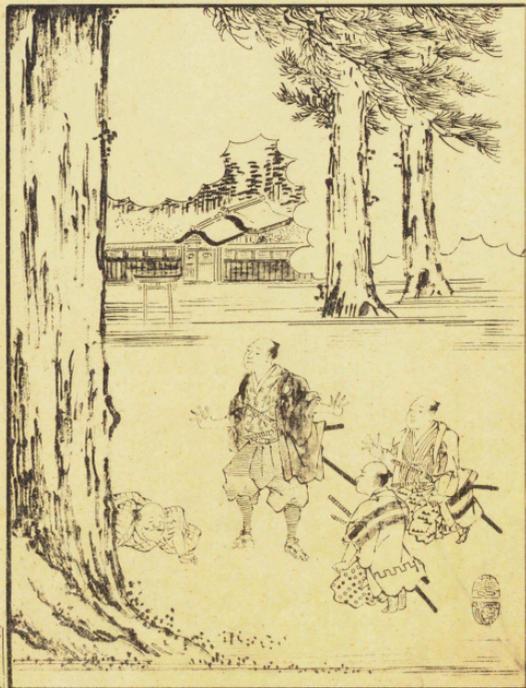
或ハ見物の諸人奔走して其賑合常に百倍たり又四月下旬より五月

四日まで店々にて曹人形普請刀お色・飾り物とて其賑合雛

市に同 と ちりて名古屋は雛造の上より他所のひりぬにまは

りて世の人の秘所なり 佐了は此の又世に何や とき人形

杉の町ろ起源



細工の名人出来て雖人形の外に祭車の偶人を造る其奇巧と尽し自由と
たゞいふやういふの竹田からんにさきまほりやうしりやうも其
しけ四五尺乃大人形と造り貴戚老若婦人の風俗まねくの衣裳とけり其
所業に淫ひ或は笑ひ或は怒る塔の面より氣とり誠と生ける如く肉色の
油きつた心插髪の色も眼の中もさかちいふ
一身の人間に異ちの魂あり實に奇巧なり

尖森庚申堂

庚小路乃本町東にりり修驗良實院當山法清壽院同行
みてこれとも元祖信行院ハ俗苗馬淵氏近江乃佐々木家の屬士
ちりしやいり本尊ハ仏工春日此作うむむ清須の城内乃ホ
中より掘出さる此尊像と輪室と箱に納めて埋左在しと論室
乃一名と尖といハ故世の人尖森庚申といハ乃毎月十八日青面金剛
の縁日とて春詣乃人多し柳萬千節縁といハ戯文に柳某師夜間捲
狂女に水無月乃空を涼き後小路乃つさ忘ゆ夜間帳庚申堂の賑
合や茶屋乃床机とけき函なく涼みうくられ参詣ハ損徳なりハ良室
院云云とつたふよてとび堂のりり乃たハきとつと幼なり

白華園信阿墓

性高院乃寺中にりり信阿俗稱天野治部信景本藩の

世臣ちり本姓ハ藤原氏天野藤内遠景七代の末裔下野守景隆乃
曾孫氏部少輔遠跨遠江國秋葉の城主とて吉野の官軍に屬し威と近
國小ゆり信景ハ則遠跨十一代乃孫天野孫作信章の男にて幼名
と權三郎といひのち源藏と改め正徳の末再び治部と改名ハ曾祖父
久右衛門正定永祿四年三河國岡寄に生れ天正二年とつて信康
君に仕へ奉りより打續き性高院君乃い國祖賢君に奉仕し
高武功りり其子惣右衛門孝信又英名りり其二男孫作信章寛永元年
より召出され別に家と起り多くれ采地と拜領し貞享元年死去ばこ
小わいて信景父信章の箕裘と嗣き正徳五年より武役乃重職と奉
り錢炮乃歩卒と預り指揮ハ享保八年病に依て其職と辭し同十五年
致仕し家督と嫡子藤左衛門英景に譲り剃髮し信阿孫陀佛と
稱し同十八年五月八日七十三歳とて病死ハ此翁文武と兼備し經
学史典古今乃載籍と涉り奇才とて詩歌とく生涯風流と尽せ

櫻林
古覽



人々あそびて
花の下に
坐す
あそびの
ころは
あはれ
やうに
あはれ
やうに
あはれ
やうに

山田法祥



て隨筆の書と塩尻一名白華隨筆と名づく大部の書なり。多く散失

して今僅に百冊むらりのこれの其餘の著述尾張國人物志尾張古城

志參考尾張神名帳本國帳集說尊命記集說尾張國造國司卷誌尾張十

大寺紀畧尾張惣社參詣記神臂絶塵家紋舊傳伊勢奈官記等。於寫本

より行よ。其外經學の書文筆の雜記道の記紀行の類も著書甚多く

かぞへ。作詩ハ享保板本ハ防兵詩選元文印行の玉壺詩稿等に入

入まり。陸奥の守山君御編選の歴朝詩纂後編に天野景信の詩

とく入り。また實名の持創。はらうて此信景の詩なり。とく

人なり。これとも然るやいなを究め。玉壺詩稿に木下安開の哭白

情の詞のミうて。華園信阿詩とのせとれと哀

信長公戲作の繪馬 總見寺のうち信長公の影堂に掲げたる扁額なり

近江の安土惣見寺の佛殿にやれらるる圖と元禄元年十二月當寺の住

持白翁和尚うつゝとて此影堂にうけり。とて遠碧軒記に安土

惣見寺の佛殿の繪馬に男子捧とつきと撥と傍と捨置き其と片手に

持てやとりに蚊帳と釣りたを狩野永徳の画あり是ハ信長公の御

好よりて氣と捧の如く直まらへらと捨て政せげばみよりいとよ

さとの繪に被仰存証畫圖なりと志はらり高力種信の名陽圖會に

此繪馬の圖とのを置ざれと其なぞの判りやう少くたう一り故小

黒川道祐の説とよりてこにやれらるるのみ

大治山安用寺 門前町の東側にあり曹洞宗同所善篤寺の末寺なり

永禄十一年の建立より清須の外町にあり。慶長年中こゝにう

けは杉之町の御馳走所御營建以前。國君此寺に御駕と寄せり。

事とて。瑞竜賢君御真筆とて大治山入額

と書よ。住持に下賜ひ。今猶此寺の榮とん

画像の大達磨 文化十四年の春江戸る画工北齋戴斗名古屋に來

て逗留より有下の書林ハ北齋の画帖及び小説の冊子と印刷せ

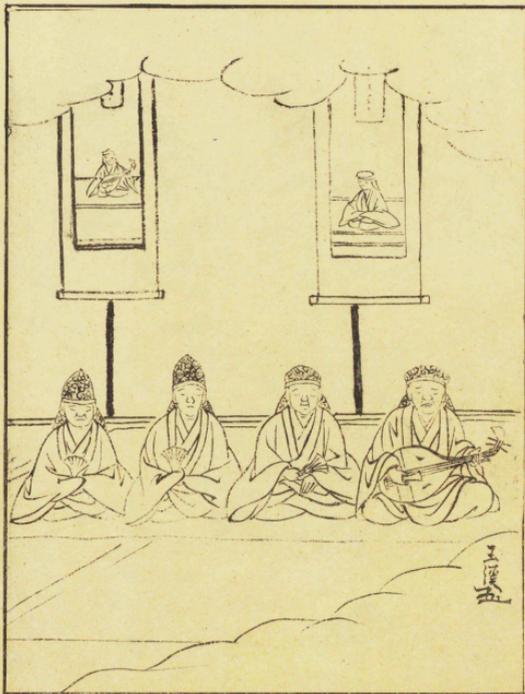
七ッ寺
稲荷社
并林泉



同寺

十月十五日弁天講

来由名所高會に之り



三五五

三十一

かりく表装一箱二重に收めて町内の重宝に扱ひる。彩女故に
てかく名つけ流ひこそや押さうり奉は。彼松原の古手店の軒にう
け置けは古衣裳の垢つきたるを又よめ改めしを着用せり人のう
げり香やさき残まつくとと思ふらせられ古今集に歌をひよみ
人ららぬ

さつねより花たちと花若とけはむう一人の地をさる

と流の歌にうりてうく名つけよせ流ひたる。いやく風流取
ふ町名なり

松原海道の跡 橘町より糞田の幡屋よりりまで二十餘町かど
家並むり頭ハ引けたる並木の松原道よて葦津或ハ清須よ
て糞田の方へ往来するなり。孝孝法印の覽富士記の帰路の條に
ぬはるよりとす所也

故人地をつつてたふ流りぬき世世ぬれやとり

せりみちり如く都人の所はよに下はよは必此地と往来せり。う
て孝孝前後の人これ紀行道之記にもに松原の道なり。うハさ
らに足とひむり宗長手記の糞田より清須へ至まは条に 宮と
たちて四五町松原に兼てまはらち宮の若丸僧俗色も有りせりてな
うとい舞ひ鼓笛奥に入り心易といふこれ法師又奥より也。こ
みふなこりわみて立りれぬ

木きのわて月とやとりもは得せはらふのつこのま討れを一笑
せぬはるく此道松原にてあり。ちちれなり

西ノ小路妓樓の跡 古渡稻荷の社の西れりりて廣く其ふはまれば

也。享保入末元文のころは地及び前津の富士見原に抱女町ありて
ありと西廡といひし。えと東廡と叫べり揚屋茶屋數十軒賣女數百
人其繁昌のさる三都の遊女を分輪く似たり。は稻荷の前に秋
樂堂といふ雅亭ありて抱客とりてなすき由世に跡らきふまひ

とちりて其頃の詩人らも東西二郡の全盛の有様と作まら
詩文甚多し板行の詩文集數十部にのちて其文辞にても
り恐らく筋のちきよもあらずんばちりてちりてちり
たり契情雙玉といふ一小冊ハ其の世喜とうも風雅人々東
西色里の細見ちりびに遊人のなりむきと戯作と板行したるむと
しりき志と本ちり

那古野弥五郎 織田信秀に属して其城下古渡其居地の古渡に住今定りたる武
衛家及び今川家に従ひしり藏人高信因幡守敷順ら一族の旧
家也歴々大身よて従士家人甚多く父子二代弥五郎と称マレ
と武勇拔羣れあしり又弥五郎ハ信長記織田真紀等に天文十
一年壬寅八月十日参河乃小豆坂の軍に力戦して今川義元乃足輕大
將由原某に討取られしり志をり其子弥五郎ハ織田真紀の天文
二十二年癸丑八月海津合戦の条に終りに公信長従此處攻清洲難田

攻掠武衛公麾下有梁田弥次右衛門者武士也那古野弥五郎年十六七
有従者三百許弥次右衛門乞憐為断袖之好勸弥五郎及家宰納款於公
于那古野吉公大悦弥次右衛門内應納公軍於清洲燒民屋除外郭所守
唯城而已公以武衛公居城中欲欲合圍而拔城城堅不拔歸軍於那古野
とよく同紀に永禄元年戊午の冬信長公俄に將軍義輝公に謁せむと
あ上洛ありしに齋藤道三の家来小池吉内と云者其外四五人主命に
りり従者三十人計具して京にのり隙と有り信長公と鏡地
とてお殺すむとせし那古野弥五郎、従者丹羽兵藏といふ者途中
にて見頭し公の旅館へ参りて其しと告げしり公危難を免
これゆりしり志をりしり那古野弥五郎の功名ちり

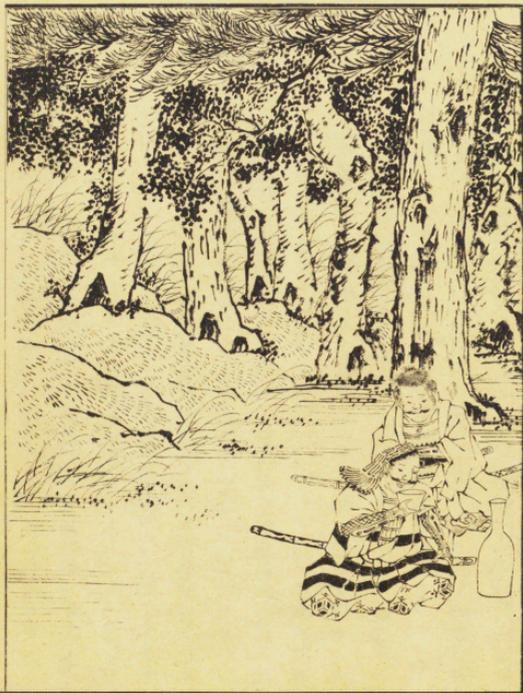
盗人の表 古渡よりしり今ハ廢まで其所定りしり古渡誌と
いし小冊に足りしりむしりハハ大なる事ありて野武士りり
親大盗人數人隠ま住しりしり里民いしゆしりいりたる盗賊



北齋画
 大達磨

高屋

一八七五



盗人森古覽

徳田吉彦集

盗人の

森の名ろみか

竹代の春

冬夫



と尺より又俳諧阿波手集ハ友次ハ撰じて古雅な板本なり

昌桂山恭雲寺 尾頭町の北側にあり瑞光山大應寺といひ一負亭年中

ころにうけを志水甲斐守忠純の内室昌桂院尼公の本願よて其後

子主膳忠行法号恭雲院玄透智英居士の菩提のため一再興りて也

元禄年中其母子乃法号によりて今の山号寺号に改む

尾頭義次塚 尾頭町の北東にありす小名所園會に為朝家とて乃せ

置置はふと今誓補古渡誌寛文先賢乃こみとより一物に尾頭次即源

義次古渡剛居す事年久一勅により南紀の鬼賊と討平け

より帝より鬼頭代氏と賜ふ義次ハ為朝の次男法名と源徳院と

云位牌ハ厨子に入て願興寺にあり里老誤りて為朝塚とよひより

志俗せり其末孫今猶ありて御城下に鬼頭氏と称一代々俗名八郎

や名のれ心ハ則為朝と祖襲すらう 海東郡福田の鬼頭竹山も同

束葉ちり為朝北地に居住あり事古書にハ所見ありといへども天野信景北平
君山等乃説に為朝の子孫ハ坂の市部庄に居住たりといへども又
高須君の御領信濃伊那郡鎮西野村八郎明神の社司鎮西氏ハ八郎為朝乃末孫
りて尾張の市部庄古渡乃鬼頭氏と同祖のより社司の家傳にありてハ為朝に
子志大助次郎一名尾頭次郎と名乗
りてハ北地ニ居住ありといへり

道場法師 名所園會にありと志俗一をいれといふ其意を尽さ

はゆ名に古書の全文と志俗一て其事實と志めぬのこ

日本國現報喜惡靈異記曰昔敏達天皇是誓余詳語田宮食同御世尾張

國阿育知郡片絶里有一農夫作田引水之時小細雨降故隱木本撐金杖

而立時雷鳴即恐聲金杖而立即雷墮於彼人前雷成小子而隨汝何報

雷答言也寄於汝令胎子而報為我作楠松入水泛行葉而賜即如雷言作

倫而与时雷言莫逆依令避即躡露登天然後所産兒之頭纏蛇二遍首尾

垂後而生長大年十有餘頃聞之朝廷有力人念試之求於大宮遷居尔時

王有力秀當時住大宮東北角之於別院彼東北角有方八尺石力王自住

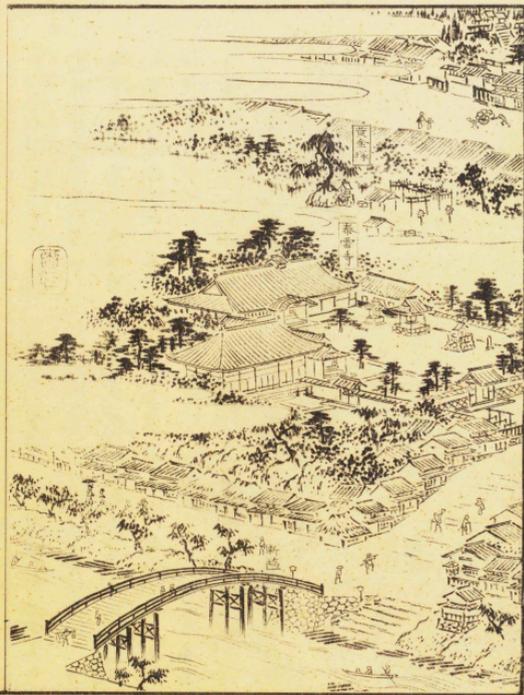
屢出取其石而投即入住處閉門他人不令出入小子視念名聞力人者是

也。夜不見人。取其石而投。蓋一尺力。王見之手攢攢取石而投。從常不得投。蓋小子亦二尺。投蓋王見之布。亦投。猶不得。蓋小子立投石。屢小子之跡。深三寸。踐入其石。三三尺。投蓋王見跡。念是居小子之投石也。將扳而依。即小子逃。王追小子。通牆而逃。王踰牆上而追。小子亦返通而逃走。力王終不得捉。念自裁。蓋力小子更不追。然後小子作於元真僧之童子時。其寺鐘堂童子夜別。死彼童子見白衆僧言。我促此鬼。致謹止此。火安衆僧聽許。童子鐘堂之四角燈。備四人言。教我捉鬼時。俱開燈。蓋覆無其鐘堂。尸童之鬼居大鬼半夜。來停童子而見之。退鬼亦後夜時。來入即捉鬼頭髮。而引鬼者外引童子者。內引使儲四人。慌來燈。蓋不得開童子四角鬼引而依。開燈蓋至千晨朝時。鬼之頭髮。引刺而逃。明日尋彼鬼之血。而求往。至其寺。惡奴埋立。衛即知彼惡奴之。吳鬼也。彼鬼頭髮者。今收元真寺為財也。然後其童子作優婆塞。猶住元真寺。其寺作田引水。諸王等妨不入水田。燒亡時。優婆塞言。吾引田水。衆僧聽之。故千餘人。可荷作鋤柄使持也。優婆塞彼持鋤柄。撞

杖而往。立水門口。而居。諸王等鋤柄。引棄塞水門口。而不入寺。田優婆塞亦取百餘人。引石塞於水門口。入於寺。田王等恐。手優婆塞之力。而終不犯。故寺田不渴。而能得之。故寺衆僧聽令得度。出家名。号道場法師。後世人傳。謂元真寺道場法師。強力多有。是也。當知誠先世強修緣。所感之力也。是日本國奇事也。

意乎加譯語二合食肉二合久濟況也不蔬和農夫クツク小細雨三合
搦フ鑽リ試コ措三踐フ利ノ荷ツ鋤ニ
本朝文粹道場法師傳 都良香

法師者尾張國阿育郡人也。不得姓名。相傳云。敏達天皇之世。尾張國有一農夫。夏月。就田于時。天墮雷雨。而父避雨。樹下支耒。而立。俄而雷墜。父前狀如小兒。舉耒。將擊雷。語父云。汝莫害我。我必報汝。父問雷云。汝何以報恩。雷答云。我令汝生異兒。以此報汝。今所望為我造一楯。舟其中。盛水。泛以竹葉。忽與我。父知雷言。以舟與之。雷得舟。作便須史。登天居。數月。父妻有身。及期生。





建て伊勢太神宮と勧請す故名付と村民の説なり昔ハ水深
く田畑の耕作と心乃依ちらさるゝに寛永年中に堀割悪水と落せ
しより上田とはなるぬ又鷲鸞喜里の海道の町並ハ寛永十一年

將軍様御上洛の時諸侯方の厩或ハ下宿なり其跡ハ家作りて

次第に繁昌の地とちりしと志はせり

榎木町 押切町五町目のちりしと白山権現の境内なる神木の榎

樹數百年とて世に希ちる老木なり故古來より榎権現と稱し

其門前の町とかく啗ひ來り因果物語正三の著書なり尾州名

古屋より下榎木町とて去者病中に藏と作りり心明藏の方計り

詠め入りて居より煩ひ重なる隨ひて孫藏と見ゆと云に依て半切

桶に入きて昇少と藏へ入ると又回りとも二度昇行て又き也其

如く七日程とて死より頓て幽冥と成り藏の事計り云てうねり

せ居りて呼り夜に藏の脇に居る也と志はせり惡俗不

風雅なる俗話なれど町名のちりしと知は證據のきり小志ははる人
あやむりなれ

大矢氏城跡 押切町の南裏にあり松平君山ノ著書に押切城ハ大矢佐

渡守居りし土人ソい傳へしれといつ頃うなる人知り

たきより志はせり大矢氏ハ今昔物語集に平致經ハ平致頼と云ける

兵の子也心猛くして世人より不似殊小大なる前射されハ世の人

此と大箭左衛門尉と云々也と志はせり佐渡守ハ致經の子孫

なり先祖の一族長田忠致等ゆかり當國にすみ來れり其ゆ

秋葉権現堂 万灵山周泉寺の境内にあり勧請の年月詳ちらば所

ら生去神として例祭八月十七日の夜試樂に鈴神樂と奏し十八日湯

立と奉仕諸人の奉詣多く賑はり寺ハ曹洞宗とて春日井郡下中村

天桂寺の末寺なり因云柳町といふ名の起りハばりといふやうり中下
花の木の地と並ひり一系に柳根とこきまざり

那古野山の麓なり。八人家建りたる。後と及池又御池池あり
とにあり。土川柳の成りて有る。やまやうらひのり。とて
贈文花堂所の各にあり。過思つる後世にのちとてかゝるの
かくきて語り。時し今春の半らるる東城。亦に名にけり。信前
頼朝とて。此子しんうまひんを。とて。

うづみ徳島

さく毛や交てふ。さく柳まうら

也者

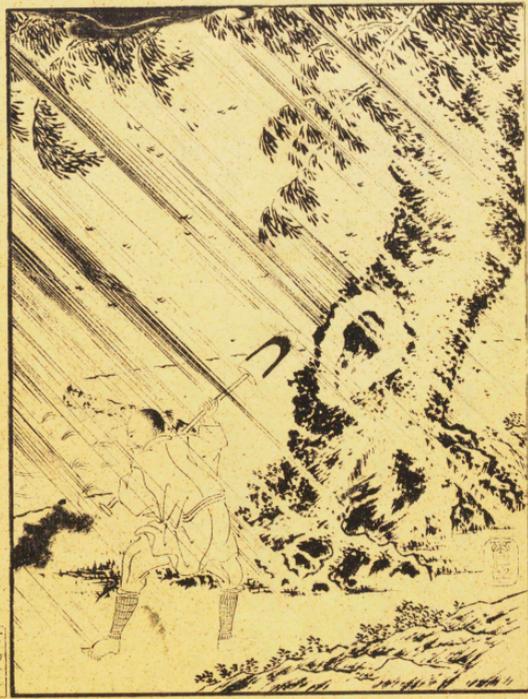
鹽川伯耆守國滿 天野氏の尾張人物志に愛智郡中下村の人と志は

一これと其居地今定かな。以國滿織田家に仕へて軍功勳勞あり天
正七年撰津田多田に居ける時信長も荒木村重と征伐せん。彼國
不到り。強ひ御鷹狩のやうして民家に入。強ひ國の安否と問ひ。強ひ
に老夫より伯耆守殿。物毎々淳直と事。万民穩。めり。り
とのみ好きと強ひ。なれや信長公。知らば。てや。語り。信前
聞落し感。思召て同年四月十七日森蘭丸中西権兵衛尉と御使。り
銀子千兩と國滿に強ひ。復賞。強ひ。信長記に志は。

一〇六

織田真紀に伊丹の城卒と戦ひ敵の善士三人と斬りた。軍功により
て白銀百枚強ひ。志は。信長記にむねと少。一。彼國
より卒。り。塩尻に摂州河邊郡上津村善源寺に鹽川伯耆守
乃石解。志は。

土方河内守雄久 名古屋村の人と信景の人物志といへり。清和源氏大
和守頼親の裔孫。土方太郎季治の十三代刑部少輔信治の子なり。土方
氏の本貫大和なり。武鑑に本國尾張とある事。故り。太郎季治八
代乃孫丹後守弘治子息二人あり。舍兄彦三郎房治。父とより。伊勢
乃北畠家に属し。舍弟彦四郎時治。尾張の斯波家に仕。是則御有内
淨念寺俗姓の祖なり。彼寺の家譜より。叔北畠家没落の後
伊勢の土方氏と尾張に移住なり。雄久の勤兵衛尉と
稱し。織田信雄公に。乃ち豊臣秀吉公及び。東照宮に仕。奉り
軍功多し。秀吉公薨去の後諸大名不和と。雄久大



野修理亮治長と語り合せて諸將の順和を取結ひし頃の事
五奉行は是よりいふに増田長盛長東正家等説くは信長より
慶長四年九月十四日八日雄久常陸国佐行義宣の館に論せし事
まこと誠忠堂より以程なく御赦免の象と判へ從五位下河内守に叙
任せられ同十年伊勢国薦野の城主となり同十三年十一月卒去のよ
う家忠日記追加及び白石先生著書に之より其外名古屋出生
人武衛家の屬士中川因幡守清政と高名の人多しといふも
事繁々れはこれと畧す

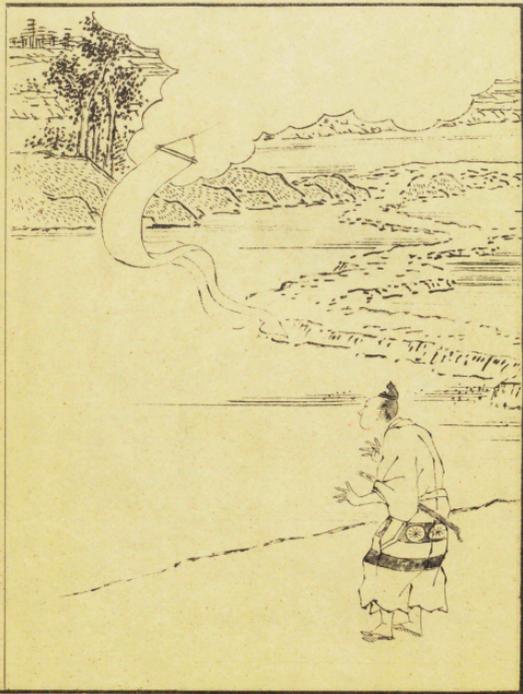
忠孝堂

中下上宿にあり西宮野間式發起し輕き御扶助の者に忠
勤孝養の味はひとわらふため小弘化乃始より杉本蘭齋鶴飼
蘭齋辰巳柏堂渡邊甚里岡田寛齋等々して忠経孝経といふめ
和漢の典籍詩歌連條までも講談たりし初生を勵ましむ其業い
まもわらわけたりしはうちより御聴に達し其忠孝の名にめでさ

せ移ひ恐多くも忠孝堂三字御源筆乃扁額と下賜ひぬ則聖教
忠孝の道に貴賤のへりてなき事とまり信(ぶ)ちと(べ)む
泰心賢君下と御憐の思召莫太にわらふ事し士外の者こそ
了ても活こび奉り御逝去のちより悔め心よりてきえ立たは御
奉公と仕りし一般に御患こ也

堀留

中下御門の外朝日橋乃下なり慶長十六年の夏より堀川と御
堀割りてこゝと堀とあり川底甚深く海潮さくまてさし來り
故堀留くも呼べりしは此のりりして鯉魚及び鰻魚のかり
止め北にありて救守の御米藏の御赤井丸(御引移)其跡新
馬場及び芝生に松林と成り居りて天明のまゝ大葺川と疏鑿して
堀川に落し又堀詰町まで江川乃分水とと漏洩せし後川に流氷多
く年々洲を押し出あせてさし潮ハ二里計の南まで退きしは昔
昔の姿とは頗りたり(一)蕉門け荷を撰ひし俳諧書成後種元株



の自序あり
て板行に
にのせよは堀川月見舟を登舟と左にのりて其頃のさほ
と味い知れし

今宵は八月十五夜月見やまをたてて川也の兵争くこゝに
月見は秋の夜をささぐと省のまゝにひびきなり
木にさかす花をさかす
物くとも月の光りて
りて月や水の光りて

丁し月や水の光りて

雙古

雨後のれに休らふ月夜

神屋

月又舟借まはれし舟

水舟

いそ月の夜や湯釜の電

可永

くらりりる我に月又舟を食

与竹

きのつりり月先に夜や茶や所

松牛

人のちりりれそは

松ト

月や水

冬文

て心月や伊智志

収宣

御園町 御園御門外より七ツ寺の裏門の西まを南北半里余ゆり

乃高人より住り其うち南の方多く武士町とむむ清須に

伊勢太神宮乃御園町の乱世に退轉して御園廢地名のみ残り

市街とむむ後ハ其傳とむむ文字とむむて文禄三年長

尾武藏守吉房入道常閑乃清須の市日と定めゆり制札一枚證

狀一通當町の紺屋某の家持傳(た)りに見當野町といけり

當所よりつりてのち猶又文字と唱へて替りて御簾野町といけり

道園屋鋪 御園町通り乃南れよむ西側にりむり賀島道園御

薬園と預り奉りてのち某草とい所とて培養したる

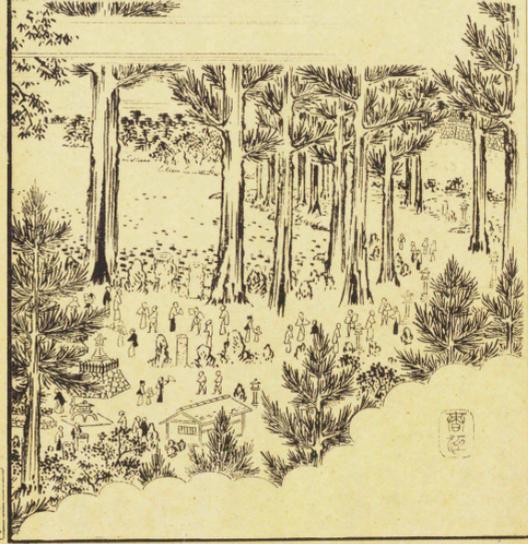
御菜園と駿河町北の御下屋鋪の内へ移し居りしをち廢跡庶人の居地となりぬ道園ハ學匠ノ名ありて子孫本藩の侍匠より海邦名勝志名住境邊に永壽院督島道園號東和近侍瑞龍公最達匠藝老後所詠養生和歌百首有りと云ふなり

學館ノ起源 此瑞長島町乃明倫堂と云ふ名所國會に乃置きしれと故りて其事實を詳にせば令江戸名所國會の神田此聖堂の如紀伊國名所國會此和歌山奇合橋の類宮の圖を之に其御模様を小替りありて一様なり此明倫堂と又其字同なりし故に其異同と云ふもさうに覺し一覽に傷小柳國祖賢君儒學を御眞隆なりせられ羅山先生と珠に寵遇し流ひて寛永九年江戸上野乃林氏此宅地に先聖殿と建させ居りぬ羅山文集の武州先聖殿記に庚午上野且母受其金之恩費乃在工構小塾主父庫柱受瓦陽益和原義直御有番島之益志經始一履置聖像及銅首五條字曰先聖殿又其像聖像以實也字并其聖惠之尊也古之同字不似知是則御治世之後江戸及び諸國に學館經營の權興なり

神田昌平坂の今の聖堂ハ元禄四年の御建立より六十年ころの後なり 又名吉屋乃御城内より孔子堂と宮み居りぬ唐銅はくまの聖像と安置し二仲の祭典と修し居りし明倫堂外より敷地と居り學問所と取建させし門弟の教授なりぬ居りし芳澤退耕の後松平秀雲須賀安長等に乃多居りて講學をせしめ寛延二年十一月十四日明倫堂と名づけ居り其後天明二年乃たふ今の學館と經營し居り五月成就し講堂と云ふ久敷ノ字に殿舎備はりけれ細井徳氏に純述館に惣裁と命せりれ主事役教授役ホの諸官人を定めしれ同七年四月聖堂と長者町の方小建居り前件御城内乃からりし聖像と遷す居り春秋の釋菜怠りなく修し居り平日教百人の學生と置練學とせりぬ居りし永世退耕なく天保四年正月より儒官鈴木朗と命せりれ日本書紀以下乃和書と講談なりし居りしより和學乃講席も始まり植松茂

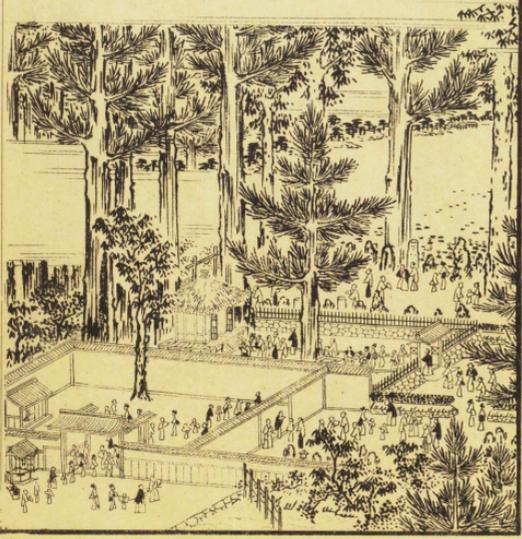
七月十日
観音拜参

と池あり
てちびのちび
たむくよ
ふゆのちびありて
おもしろ人

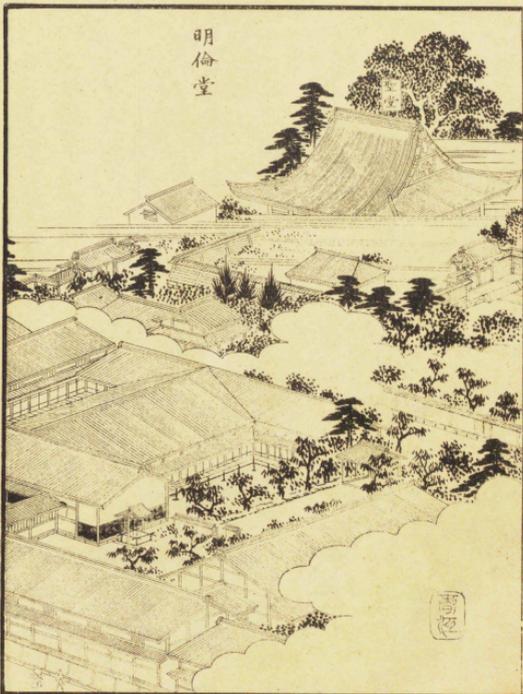


香

一ノ五十一

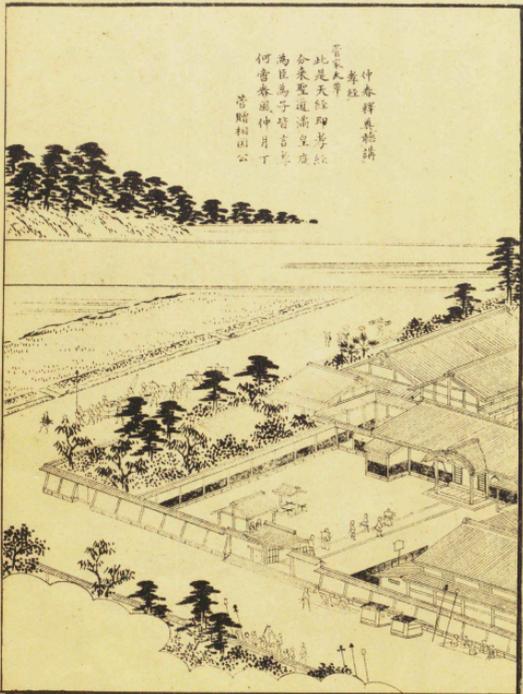


明倫堂



高

仲春祥燕鵲
登大亭
北是天經
合衆聖道
滿堂
西臣馬子
何嘗春風
仲月丁
善贈相山公



むやぶきア」と云はる。此に於て文字を用ひたるは、これと仰られり。是又、
字しく大契ひ、亦まは合也」として退出し、これ日雇奉行といふやうに
彼、言葉に叶ひしを神イハレ名ナと云ふ。

晴明の辻 来名町筋袋町の四辻と云ふ。往昔安倍晴明イハレ、松符マツノ此地
に埋め置り、故後世迄と災難をまぬれ、御辻府以後當町に
限りて火事なくハ、實事と云ふ。いづくも、あたくし神社考に安倍晴明
若仲麻呂之後也、就賀茂保德字天文窮其謚奥云云。晴明有松符世人就
而求之、因与鎮宅符貼之、屋宇則免火難と云ふ。まなく、一、元晴
明朝臣の事蹟、この小町は海軍部丹羽郡等とありて奇
談多し。

福島正則普請小屋の跡 袋町の延命院ニ、延命寺ニ、此の跡あり、其
舊地あり、一、信へり、慶長十六年、御城御造營成、就の後其普
請場の跡へ、正則朝臣再興の清須の延命寺と移され、なるは、一、境内
なり、愛宕権現ハ下方左近永弘の守護なり、一、又社と云ふ小瀬氏より、此

鎮座也。是亦福島家の由緒たる小町に、此普請場跡の事ハ、
異説あり、一、概より定め、一、後人の説、一、考ふ、一、昇平日
新録実田、藤新録、治学、抄行に、忠吉君卒後、封義直君於尾州、賦役諸侯以城、那姑射
當此時、半福島正則、池田郡政、淺野幸長と丹波、嵯峨山之經營、以不与、那姑
射之役、既而、神祖有所以深慮焉、乃亦命三侯、倉餘山城、以就於尾州之
事、一日、正則語輝政曰、此年以、駿武兩城經營之、後而、諸侯費民力、亦許多
也、然武与駿也、為天下鎮城也、則不敢顧其勞、今支君之居城、而亦役諸侯、
豈不亦甚矣乎、公則老君之姻戚也、請為我備私喜之、輝政不應、加藤清正
曰、福島侯之言、粗直也、若實倦乎城、役則不、豈長言而、致馬耳若不能、然則
馬得違命、正則乃、報然矣、輝政以為、戲言而已、後日、輝政以語之、神祖神
祖乃、令輝政告諸侯曰、聞諸侯或有、厭倦乎城、築者焉、若然、則任意而、還其
國、固城深泥、以待我、至吾、請問行期於此、首正則而、皆大感怖、罪、勉就事、大
城終成矣、と云ふ。

北城山葉師寺 西銀治町通、袋町より南にありて浄土宗性高院乃未

寺也貞治元年清須の五條川の淵に宗師の本像流し寄るべしと拾ひ

とりて城内の北橋に安置しける。此像夜に光明を放ちたり。天文

五年城北北市場に茅庵を營み其像を納め北城山正光寺と名付けたり

と慶長十六年此地よりついで今の寺号に改めり。松平君山

乃著書にいひりされりと清須の城、永和年中に斯波氏始めて築

き守護代を置て守らせしゆみ、されハ貞治の頃ハいま城ハな

る。ちる年号の傳説も少く間違ひたりなり。へ。本堂葉師の同座に

安置の十一面觀世音ハ行基菩薩ハ彫刻して廣井八幡宮の本地佛也

とて享保五年當寺にうつり。

醫學館試問 醫學館ハ華名所國會に試問ハ唐の及第遺風なり春秋

兩度當館して諸医官御各脚醫師ハ書讀及ヒ惣御醫師の子弟年中

修業の勤怠を試む試司ハ代々淺井家に屬從寛政十一年より淺井平

司試問、書品ハ素問、吳樞難經、傷寒論、金匱要畧とこれ外諸方書諸本

草等なり當日參政二人監察以上司一人右筆署の棟梁一人并に奥表

乃官医出席ありて問對を檢察して會文の中不中により賞罰を曰

中二つ治(い)とめてきてに御規範なり。

淺井氏本姓和氣朝臣とて京都に住り代々醫學に通達なり。淺井

周伯名ハ正統号ハ東春田華馬業記に醫學講說淺井周伯御幸町跡小路上

同周道名ハ包政号ハ東野其名良臣名鑑に出同賴母名ハ惟實名ハ國南其

傳小に出り著述病撰等手抄要名あり同周名ハ正路号ハ南海其名皇國名臣傳に同貞庵

名ハ正封通稱平とて其名藝苑筆記に出。かく此如く醫學海内にきこえ

著述の名家銀杖氏十字と本朝千家方とあり。源懿賢君乃御真筆なり。開講

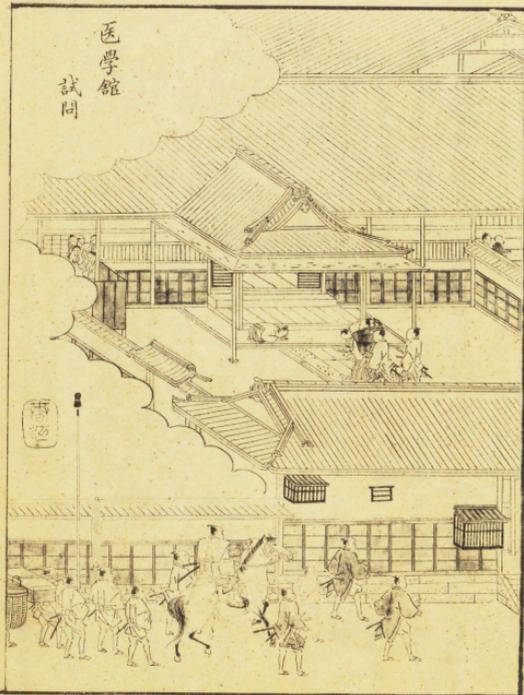
至安永帝ノ祭日等に揚子奉治其余の平日ハ

兵部少輔正高朝臣澤業の親とては、

四子出産の事 塩尻にきいつ頃我名古屋有下伏見町堀切一町上東へ

入町ありて四子とて入りて産婦はくはなきて逃ぎしるまであり

醫學館
試問



いと志^しは^すて年月も高家の名もいと^しり^り世に稀なる多産の
九日本書紀以下乃國史實録中に三子とありて物と賜ひ^り事多く^りて
了^りと四子以上と産^む其希^らき^に續日本紀云慶長三年二月戊子山背田相樂
郡七嶋首形名三産六次初産二男次産二男其初産一産二男二女賜報并乳母と^り正保
二年秋行^むむ^の産に三條院御宇德仁二年に一女四子と^りむと志^すは^すて^り近世に
と其多^しむ^の産に空永二年二月廿二日攝州丸龜農人町の高家廣島屋茂
右長門某六子と産せ^りと^り廿七日子廿四日の夜男子廿六日の朝女子同夜二男
子廿七日子と産せ^り産せ^りと^り廿七日子廿四日の夜男子廿六日の朝女子同夜二男
後生^り子^のや^とて^り死^につ^らく^を産^むと三月四日に身^をう^けける^にと^り志^すは^すて^り
北笠院謀に和樂兩岸和國領無取谷と^り所^をて^り四子と産^むと泉州成田左近物語
あり何と^もめ^つら^き多産^のと^りと^り

氏政山隆正寺

花屋町筋の長者町通の西にあり浄土宗にて石切町

養林寺の末寺なり養應元年山下市正氏政其母隆正院乃菩提のた
めに東寺町寶樹院と云慶寺と再興此地にうつ隆正寺と名付け
養林寺の住僧專譽と開山と隆正院ハ志水加賀守宗清の二女うて
相應院君の御妹なる故國祖賢君瑞童賢君に近住奉り勤功の
り^り女性たる山下大和^{三郎半}氏勝に嫁して市正氏政と^りめり氏政同

苗時氏に命^じと創業録と撰^りり歴代考軍一卷安土創業録^五難波創
業録^十武江創業録^六慶長創業録^十創業録引證^卷創業録考異^卷
卷^二して四十一巻と著^り山下家に傳へて門外不出の秘書と^り並河通明
乃序^りりて希代の實録なり本堂阿孫院の木觀音堂^{十一}一面觀音^ハ是
則名古屋三十三觀音の一所也

法皇山法然寺

日置乃旅籠町にあり浄土宗と^り觀田^正覺寺の末寺

永正四年三月深空法師の建立にて明鏡山法浄寺と^りい^ひと享祿三
年今の山号寺号に改む本堂の本尊地藏菩薩安阿孫の作^りて其願
内に納め^る小像、後白河法皇の勅刻法然上人の闍眼佛と^りい^ひ傳
令ハ腹ごもりの地藏或ハ子安地藏と^り稱^ひ山号寺号ハ此小像に^よ

と^り

洞松山長榮寺

御城外の東北柳原にあり

源順賢君の御本願と^り

此地に御祈願所を御營建^りせられ文政六年四月廿六日智多郡若

屋寺村岩屋寺の住僧蒙潮（一）とて住持とて移り天保六年愛智郡諸
輪村洞松山長栄庵寺（二）号とて天台乃梵刹とて移り蒙潮
ハ學徳能書等世にカレシキ名僧なり 本堂（三）唯観音拜堂（四）東にあり
其餘殿宇多境内の蓮池廣く折一蓮二葉乃瑞華と庄は是則戒律
乃餘業也といへり境内より南の方ハ鳳山公子勝長君の御別荘の跡
也當時多春園停雲岡玉壺亭觀蓮舎捐翠軒養老泉望岳臺（五）七景及
ひ御築山臥柳湖赤松橋等山花水月の風景と愛し移りてとて杜把園
句集に

多春園の櫻也（一）移り春とてうりひゆも泉石の様ハ申す（二）柳木
を植は車子（三）乃如く植させ移り早き櫻ハちり浮びて汀のけき（四）
ゆらく（五）わり（六）ろ（七）ろ（八）乃花の上漕（九）と聞え（一〇）乃家酒の景色とた
ひやらまを花に漕出（一一）小艇（一二）とはほけゆれど（一三）こ（一四）に心
と身も（一五）こ（一六）りき（一七）て（一八）五文字（一九）ハ（二〇）い（二一）ま（二二）さ（二三）と（二四）れ（二五）ハ（二六）遊櫻木深き所

に分りて停雲岡に登り

朝上停雲岡雲在花深處暮下停雲岡花深雲未去

士朗

と兄（一）と（二）り又大鶴（三）葎竹有（四）といふ俳諧師に御庭拜見とゆ（五）り移りけ
まは御供（六）け（七）小（八）よりりて

うつたうの花に（一）あ（二）か（三）た（四）ふ（五）りけ

ヤヤゆけ（一）より（二）一（三）一（四）其御園（五）ハ（六）こ（七）ろ（八）を（九）廢（一〇）れたり（一一）と（一二）ソ（一三）ハ（一四）今
に佛残りて（一五）ハ（一六）殊勝（一七）な（一八）る（一九）雅也

東序端 東の方の御郭外（一）もて數町南乃方を武平町と（二）ハ（三）是より東の
方東西一里南北半里余大小の武士屋鋪よてたまさ（四）こ（五）にハ（六）工高の家
並寺社等も交ま（七）るむ（八）う（九）乃那古野山の裾にて今と山口と呼ぶ其廣
き事名高き碁盤割に數倍也

坊（一）坂 長久寺横町より中杉の方へ出内道にあり竹腰家の下屋鋪と
藏王の森との間と切通（二）ハ（三）オ（四）ハ（五）長坂（六）ち（七）り多くハ（八）大樹（九）鬱（一〇）と立（一一）こ（一二）り

白昼といへどもいざくらを僅^いの闇かれども左右前後人煙たえて物
すけましく深山乃嶮路の如く深夜に幼児乃様しくまゆ妖物出^{あや}る
ふこれ俗説なりてむしう坊の坂と云ひたりなり厄ヶ坂も此西
向の方にありて女児の形乃化物出^{あや}る坊の坂厄ヶ坂と一對にい
ひゆへあり孫州雜志にハ此二坂をむしう片山神社盛なり一時
乃男坂女坂也といへり

天道社 大曾根八幡宮乃西にありて大日靈貴尊の祭内末社鹿島香
取社月神八幡社稻荷社加良須社惠比須社天満天神社ホあり皆
日神乃御由緒は神々なり例祭九月十四日十五日
相應寺洪鐘の銘 名所圖會にもらてり今羅山文集によりて補ふ

尾州相應寺鐘銘

尾州愛智郡寶龜山相應寺者從二品兼相源敬公奉為顯妣大夫人所統
堂建也新鑄華鐘以祭之樓其慎終永念之孝至矣於是奉命謹為之銘

銘曰

尾陽城東相應紂宮三寶垂教一差達聽萬声不盡免氏有功長樂花
外天竺月中柔域告曉蓮社傳風千歲遺響惟孝無窮

寛永二十年九月十六日

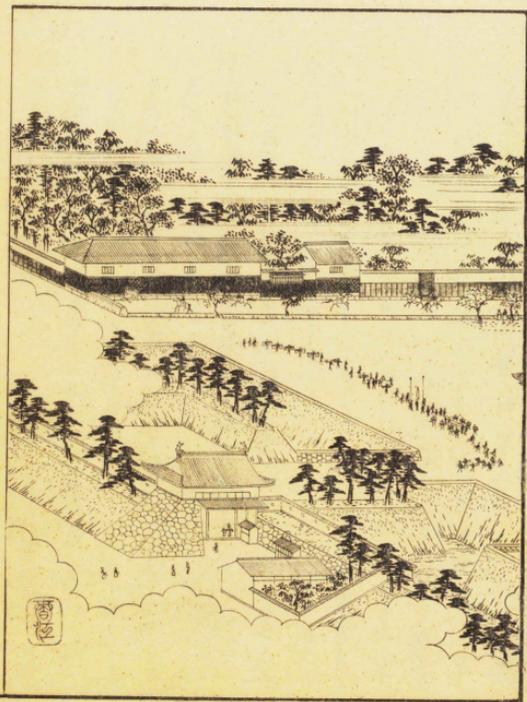
因に云建中寺の鐘と羅山先生此銘文より雅趣此鐘と一對の如くと
てしや 志は先年曉失せし誠は惜むし事なり

歌塚

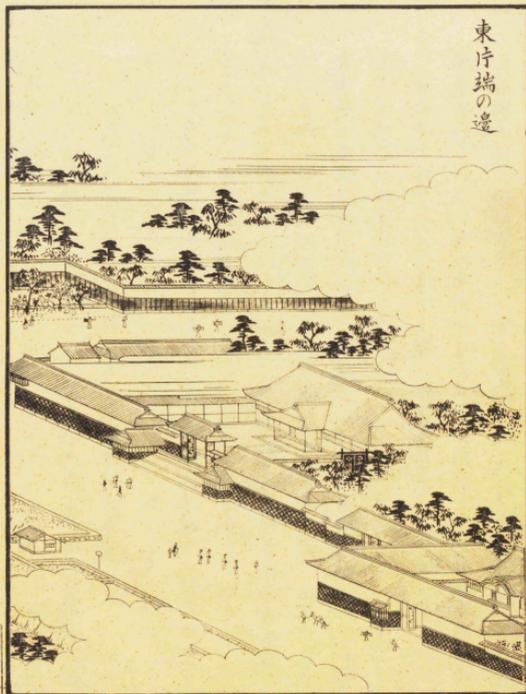
建中寺此境内にあり土御門兵部卿正二位泰邦卿の息女忠姫^信
子^照江戸御館及び大塚御殿に宮仕へ上臈藤町とのと称し退隱乃後名
古屋御下屋鋪に住し剃髪して映珠院と号し英才拔羣酒と好し和歌
とよくいひけし時の狂歌

世の中におわりまらふ時うらなひなきは迷ふなり

其氣象かくれ如く文政十年四月廿日七十四歳よて死去西掛町に葬
内和歌乃詠草歌帖ありといへども秘して人に足はる事なり没後遺



東序端の邊



一六十一

小より詠草とてに埋て一堆の塚とす世人是を歌塚と稱せり

村岡^月ぬし^花の里へ玄明て意山いけふ林の夜の月

あけ^花假ら^花辰のまよりなれくとも春ふれてぞく^花原

ほく^花き^花は^花春のまよりと外の花はゆくに^花ふ^花さ^花れ^花一^花夢

其風調大概うくれ如くちま^花い^花ん^花を

九十軒町 新町の東にけ^花き^花也来^花船人陳元賛号^花と菊秀軒^花射^花し^花呼^花り^花九

十^花中^花の^花當^花町^花に住^花て^花寛^花文^花十^花一^花年^花死^花去^花び^花彼^花寓^花居^花と^花て^花ち^花り^花と^花其

名^花残^花と^花失^花く^花て^花其^花頃^花迄^花新^花町^花東^花の^花切^花と^花い^花ひ^花と^花九^花十^花軒^花町^花と^花改^花り

と^花と^花名^花所^花圖^花會^花に^花元^花賛^花の^花傳^花と^花う^花せ^花置^花げ^花れ^花也^花来^花朝^花と^花い^花ゆ^花さ^花り^花年^花月^花と

と^花志^花尚^花も^花ら^花且^花又^花画^花中^花士^花客^花兩^花人^花の^花巧^花も^花画^花乃^花も^花也^花と^花り^花の^花さ^花あ^花が^花き

誤^花り^花時^花代^花に^花た^花り^花故^花に^花少^花く^花これ^花に^花補^花ふ^花り^花と^花り^花投^花化^花と^花て^花長^花寄^花り

に^花居^花り^花多^花く^花化^花唐^花人^花等^花慶^花長^花の^花末^花頃^花も^花志^花り^花悪^花業^花と^花な^花と^花り

元^花和^花五^花年^花海^花賊^花と^花かり^花日本^花の^花衣服^花刀^花劍^花と^花帯^花和^花人^花の^花姿^花と^花ち^花ら^花教^花船

と洋海に乘出^花福建より日本^花來^花向^花南^花船^花と^花掠^花り^花物^花と^花盜^花み^花奪^花ひ^花取^花付

事^花甚^花一^花福建^花迷惑^花一^花浙江省^花の^花導^花き^花と^花も^花て^花書^花檄^花と^花日本^花に^花き^花上^花て^花其^花惡

事^花と^花止^花む^花事^花と^花訴^花し^花同^花七^花年^花其^花訴^花状^花使^花に^花明^花國^花の^花人^花單^花鳳^花翔^花と^花い^花ふ^花者^花來

り^花一^花一^花風^花翔^花詩^花文^花に^花疎^花う^花り^花一^花一^花陳^花元^花賛^花沈^花沈^花戎^花人^花二^花人^花の^花学^花者^花附^花添^花ひ^花來

り^花一^花一^花訴^花訟^花と^花り^花て^花風^花翔^花等^花一^花帰^花國^花と^花り^花一^花一^花元^花賛^花ハ^花皇^花國^花に^花と^花り

當^花國^花祖^花賢^花君^花の^花名^花に^花應^花り^花奉^花り^花て^花名^花古^花屋^花に^花移^花住^花せ^花也^花其^花時^花羅^花山^花先^花生

乃^花贈^花答^花の^花詩^花文^花り^花羅^花山^花文^花集^花に^花答^花大^花明^花人^花單^花鳳^花翔^花代^花元^花和^花七^花年^花云^花頃^花年^花我^花西

鄙^花貪^花賈^花屢^花侵^花掠^花海^花上^花福^花建^花道^花都^花督^花使^花單^花鳳^花翔^花來^花訴^花之^花云^花云^花と^花兄^花之^花同^花詩^花集^花に

和大明人陳元賛詩并序

辛酉春大明國浙江道奉檄使單鳳翔來於浴余於板倉伊州太守及防

州太守許而相逢蓋己未年西州所在投化唐人假高人名而出海上帶

日本刀劍著日本衣服掠盜自福建來日本之高船而後又為商人輓而

歸於日本此事福建檄浙江浙江以聞因是告於日本云三月十三日余

赴戸田為春閣与明使晤語終日風翔雖粗知字不能詩其下陳元贊作
詩呈余余即和答之
林道春

揮筆虹蜺影有華使臣今日詠皇華心知不隔語言異四海弟兄同一家

と志はなり元賛明清の乱をよみて投化せよといふ説は誤りなり也
去よりハ數十年前に舶來セリ人なり因に云兼穂録に尾列うて
より起心といふと志はなりハ附會の說なり易林節用集に卷頌のり
ゆへいんといふと附より愛長日前よりハ葉子なり

小牧町仇討

元和元年大坂御退治御陣あり(本藩の士は軍功

を御せんさくつりせり)時河地権内(同僚の魁首なり)と

やまらて矢場連(指物と城堀のうち)を取落しそれを取つんと

高替く猶豫セリうちに内藤左平深尾佐五右衛門等四五人に先を

けられ(故彼等)一列の御褒賞に預りさる(権内無念不快を

うさく取扱の執政某の朝臣と(恨みけふと)刺(左平佐五右

衛門雜言を吐き)権内(指物落したる)を不覺のう(嘲り罵

り)

けれハ遺恨を呑みて双方中らひよつたり。年経て寛永二年

十一月六日山下市正兵衛(頭ハ太郎)石堂竹林柳田治左衛門内藤左平河

地権内深尾佐五右衛門相容うと寺部家の三ノ丸の第宅(茶事に招

うれ各一座して餐應に預り)取扱河地と深尾(手水に立々)前後

と争ひ口論するの大坂御陣甲乙の事(引出す)と及傷に

及(山)と山下押鎮(其場)事(を)な(り)會席終(り)

各(各)告(て)立(出)下(山)下何(ま)伴(ひ)同道(して)御圍御門の内

なる父大和氏勝(屋鋪)に歸り三士(中直)の盃と取結び(た)向

後遺恨(を)と(り)又口論(を)起(り)た(り)悪口雜言(を)し(り)落(り)終(り)に

戰(に)及(り)河地鎗(を)向(て)と(り)從者(を)早(に)退(れ)朝(に)

拔(得)さ(り)た(り)内藤(と)切(り)結(び)斬(り)た(り)石堂(を)

へ(り)と(り)志(す)り(て)納(め)ら(れ)其(う)ち(に)

て(り)と(り)志(す)り(て)納(め)ら(れ)其(う)ち(に)

陳元贊
寗宅

元元唱
和集曰
余自萬
治已亥
李致
政公尼
列寗宅
唱和通夕
棕欄元贊
早亦披簾時信
兩賦猶揮筆暖



驅寒根莫不是
允株鍾千手觀
音幻化香
和棕欄元贊
破笠飄雨未
乾脚長蕙短蕪
獨寒休為弊葛
陰塵土若有狂
雲拂月香



内藤切伏られて深手を負ひ無念也と自ら下りたり深尾心得
ことと忽ち河地を殺害以内藤の帰宅の上相果つれば西士相討とも
に存命せしむればちこちなく皆ともに家督を下され権録と拜領し
深尾の助太刀のみぞ喧嘩の本主にあつたれば殊さら御構ひ
其うち権内の嫡子河地藤左衛門同く弟十郎父の仇深尾佐
五右衛門と討果さん心す有といふも公裁を恐て時節と待
年月を送る寛永十一年の冬本阿弥江戸より當府に来りハ
御城に召て御道其の目利と仰付らむ其序に在番の人々目利を頼
みりつゝ深尾も又をけんとて刀を先年権内に討留する大業物
也廣言ち河地兄弟聞より今黙止しといふ父の誓を破せ
んと企てけり十一月廿四日弓銃炮隊長深尾佐五右衛門東谷山御
狩場へ出づる夜に入、小牧町筋を騎馬を帰りがつを御目代後
河地藤左衛門同弟扈從後河地弥十郎急ひて待請、藤塚町と善

光寺筋との間より左右に頭出し出て佐五右衛門とさ狭みて詞を
うけ藤左衛門手鎗より馬上より深尾を突落つれば弥十郎ハ小長刀
うて首を刎むる深尾は徒士者技速懸りたれども追散
一城野山田金左衛門方へ引取り兄弟おくれ名古屋を立退き備前の
岡山へ立越城主安の扶助を蒙り彼地に居住せり聞えけり佐五
右衛門より子息深尾七郎兵衛當角と立去備前に至り河地兄弟と討果
さむとゆひたれと岡山は老臣伊木氏兄弟に与力嚴重に警固
つれハ深尾はいに本望と心得りし紅葉集編年大事尾陽萬
話等に足えり此仇討の事正徳六年執行武家蔵收記より佐五
祥景山普藏寺 鍋屋町裏に在り菅宗より万松寺の末寺なりや
那古野村にありて万松寺は別院なりハ御城御營業にけき御深
井丸乃西中下御堀なる地にこりたれハ昔地を賜りてこりにう
けれて中下御堀と御鷹部屋の南の方に御堀とせり大樹の古松
あり文化四年八月廿五日大風に御堀へ倒れ込



新野 走御詩
 念慈 念慈 念慈
 念慈 念慈 念慈
 念慈 念慈 念慈
 念慈 念慈 念慈
 大江正樹



小牧町仇討

一六六

もいになりて跡方らうなくハハ普藏寺の境内の松なりと云ふ寺ハ
天文十六年の開基なり松ハ其以前より老樹なり實に四五百年に松乃
とつて物すこきまて生じ茂り枝よれて御垣水にひこりあり古致に松乃
を何枝より一丈くかんともみたり一にたふさるる今ハ五十年及びのむ
なりて語を傳ふ
入さるんち

攝取山遍照院

同所にあり浄土宗京都智恵院の末寺なり此つて昔
人家もなかり一時僅なる地藏堂ありて定朝の作と云ひ傳へる
其像と安置たり其堂守り念宗と云ふ僧圓卷の上才なり
ハ藩士青山孫次兵衛春勝菅谷次郎兵衛昌良等其遊戯として親
みなり彼堂に行て遊びハ名作れ地藏と草堂に置る
事と云ひ思ひ元和七年青山氏國祖賢君に願ひ奉り此地を拜
賜一寺と建立菅谷氏力を尽し堂守を管み念宗院と名け付た
るを延寶八年八月十五日今れ山号寺号に改む本堂に慈覺大師
の作と云ひ傳へる阿孫院の像と安置彼地藏は古像ハ別の小堂
に安置せり

汐見山

同所南方高岳院の後園と云ふ達左舊記に高岳院の裏れ山
にのかり南と云れハ熱田の沖尾と云ふ故潮見山と云ふ今ハ南に諸
木茂りてむす此棟に居たりハんび九尺は木のかまて云れ
是如元尺の也過一年五月節夕前に寺僧の案内と得て數百歩登
内谷も深く坂多く難所ありて木當路を行。如く絶頂に至りて平地
あり廻りに竹の欄干と付け人の落さゆやうに志つり此所ハ春秋に
孫客と云ふ名高と云ふり町に此幡殿下に見たり一典の事大
形なり御當地ハ小塚らき風景也乃道に稻荷の小社あり一
名と云六乃宮ともいり如何と云れハ四百六十年の狐の住む故也
云い傳へるなり寺僧いり又青石乃古き石塔あり其石と云
寺ハ其鳴鐘の如く表れ墓所に有り諸方れ子供寄合
寄敷きさういなど餘りあり故に今ハ藪乃中に捨て
りり予もたぢ人数なりと云はせり
俗説にむす或士家乃内室
嫉妬の念深く妻と護く夫

にうとまも終に追出させたり。猶心よかりば、ちりけん天也出と婦りけ
は時毎の如く酒をすそめざるに。乃妻産す。一幼兒を與身の如く事とて切殺
けり。余り酒の肴よきとて出りけり。夫柳天。忽ち短刀を抜きに其妻と切殺
けり。叔五郎寺たれば、高院に葬りけり。猶又笹礫石塚に。識り其石とて
けり。金吾と發す事多年にても、わゆるいひの地より、識り其石の虚説
り。ちりけん、
危りちや、
死りちや、

少子部連鉤鉤墓

高岳院前の武家屋鋪のうち

小首

塚と噂ひちり、鉤鉤ハ天智天皇御宇尾張守、當國に在りて、
天武天皇と大友皇子と御合戦の時、天皇は御味方に参り、とい
へたる故、ちりけん軍功を捨て自殺したり。此ちりちり、
と、といひ傳へ、いもく、往古の墳墓の跡ちり、き、年代久しく経る
今ハ塚山の形も定らな、は、是則尾張の國司より皇都より下り在
國せ、人々れ姓名の六國史に、く、く、く、く、也。日本書紀の天武天
皇元年、近江の朝廷に亂を避けて、天皇及び皇后、大和より伊勢に、
れて軍兵を催し、美濃路より、責登り、孫一條に、天皇留皇后而入、不
破

四六十九

此及郡家尾張國司守小子部連鉤鉤、奉二萬眾歸之天皇、即美之、令其軍
塞處、道云云、中、尾張國司守小子部連鉤鉤、匡山自死之、天皇曰、鉤鉤、

有功者、也無罪、何自死、其有隱謀、歟、と、え、ちり、此邊の近き山に、く、れ
ち、自殺りて、ち、く、
孝保の、高山、竹隱、と、く、
真身實記、と、く、物に、鉤鉤、計、を、く、く、
名、護、屋、
願、谷、西、口、の、山、の、手、に、伏、勢、と、て、歟、持、書、五、葉、と、繪、に、
く、く、く、く、
く、く、く、く、

松竹山梅屋寺

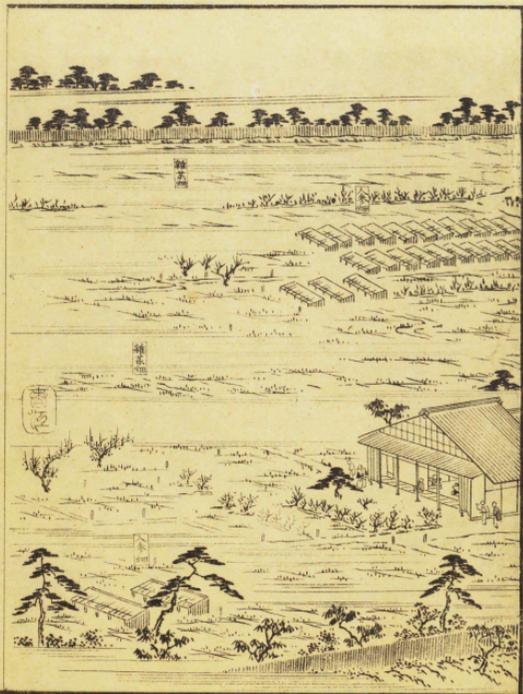
禪寺、町、東側、に、あり、て、曹洞宗、同、所、舎、榮、寺、の、末、寺、也、

織田信長公、を、伯、母、君、梅、屋、慶、香、大、姉、の、菩提、の、ため、に、建立、一、光
和尚、と、開、山、と、て、清、須、利、北、市、場、に、あり、
以、慶、長、御、遷、符、乃、後、
に、う、つ、ち、り、信、長、公、領、知、と、寄、附、り、て、
退、轉、り、て、會、ハ、寺、産、ち、

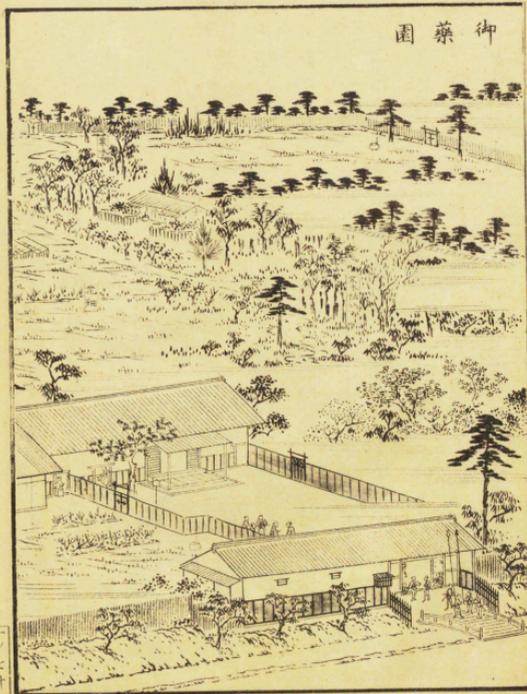
泉諦女神の堂

法華寺町、森住山、蓮勝寺の境内にあり、
版、建、丁、年、月、
定、り、ち、り、縁、日、正、五、九、月、の、十、八、日、に、祭、礼、修、行、参詣、の、人、多、く、て、賑

ハ、一、り、泉、諦、女、ハ、鬼、子、女、神、の、眷、屬、十、羅、刹、女、の、うち、第、九、番、に、當、り、ま、
女、り、て、法、華、經、を、讀、誦、受、持、り、人、者、と、擁、護、一、其、惡、鬼、と、除、う、む、と



御藥園



鬼子母及び十羅刹と共に佛の御前より誓言せしむ。法華經入
陀羅尼品に又も拾芥抄よと十羅刹諸佛化云云九名尊諱文殊師利菩薩云
云と云ふも蓮勝寺は日蓮宗京都本國寺に末寺なり

長壽山本住寺

同所にあり日蓮宗武藏國荏原郡池上村本門寺に
末寺なり永祿三年同郡六郷の城主行方修理大夫創建して六郷

にあり。連年兵亂に堂宇荒廢したるを當國の士加藤某清

須にうけく再興せしを寛永六年令に地にうつ。寛文六年十一月

廿一日尾張美濃池上流の惣録司となり。僧録司蘭溪院日真

大師墓石川伊賀守共の女邊蓮藤三郎
長綱の室備中守基綱の母なり

兼應二年五月五日駿河町乃米屋傳助とよ者節々の礼と町内を

廻りて父にう。詔より平岡弥右衛門同門十郎と名乗りて父の

敵上原喜太夫勝負くとつひに傳助驚き本住寺へ逃込けり

と兄弟の士追付て庫裡の前より討留され寺内甚騷動ひ其近所

に住居の小役人駈付次第を尋ねられ我々の江戸の御徒士役平岡
権兵衛の畔同苗孫右衛門十郎と申兄弟也先年同地乃士上原喜太
夫我々の父権兵衛と討て立退け故公義へ申達し仇討の御免許を
得て諸國を巡り去年六月より御當地に忍びて相尋候儀今日見當
り。故町人になり下りゆとも又ゆりてつち果一本望と違へ
ざるべく懐中より御免許證狀と取出し兄を召れ小役人其趣
を申達し御構これなきうとて二人は東都へ帰りけり

紅葉集に云ふ

賢隆山久遠寺 同町の南にあり高田宗と伊勢國專修寺に直末寺

なり。伊勢の長島にあり。福島宰相正則朝臣に便り清須の

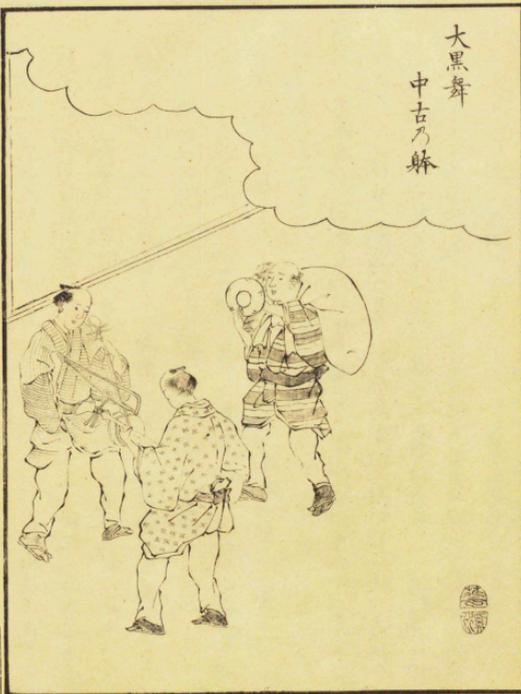
御城下に移住しと願ひされ正則許容りて便利に此地

を見立てうつしと申されり板城北朝日郷のうちを見立天

正元年に引移り正則の言葉によりて久遠山見立寺と名づけり



大黒舞
中古乃躰



慶長十五年こに移し見立の文字と改ら宝曆十一年九月四日山

号寺号と轉倒して今の如く改む江戸四谷新富の大栄寺ハリセ僅に

内藤大和守重頼朝臣拜領あり一時番主の借に若干の地をとりて寺に取立

り申され其地のいり應りたれ借地にてたすりて也といひ重頼と名

前ハリ左に改む言業を寺号とて申されいふ言業山大栄寺といひ

御薬園 駿河町北なる御別荘にありて江戸大塚の御茶園に

鬘髻より享保二十知年秋よりめて朝鮮人参拝種井に甲州甘州と

関東より御料領ありせしころに前裁し陸より文化二丑年より淺

井氏正字乃御預りとなり平之丞董太郎引きたりされを司り本草

家功者の士数人及び下役の者二十余人附屬し鬘髻寺とせり

近年人參格別繁茂し且又天保年中より粧粉製作始り

源順賢君度と成らせしれ薬園御覽遊にされし諸薬草と云

勢の色と奏せり

大黒舞

駿河町の東なる物貫ひとも正月よりわたり三四人組合

いひやくしに歌をうたひ三味線胡弓小鼓等にほせらるる

人形とゆり或は十歳以下の小兒に衣裳を飾り扇を執踊らせ人家

乃前に立て物を貫ひたり其唱歌といひしに必福大黒足らふら

うい故是と大黒まひといひいたふ故りや江戸萬歳といひ

近年八村の番人とも工夫してわたりけき唱歌とせり

連ねて米錢といひたりきりて駿河町東より出仕ハテク

江戸にハハハりたり他國もなる事希なり大黒舞ハハハ

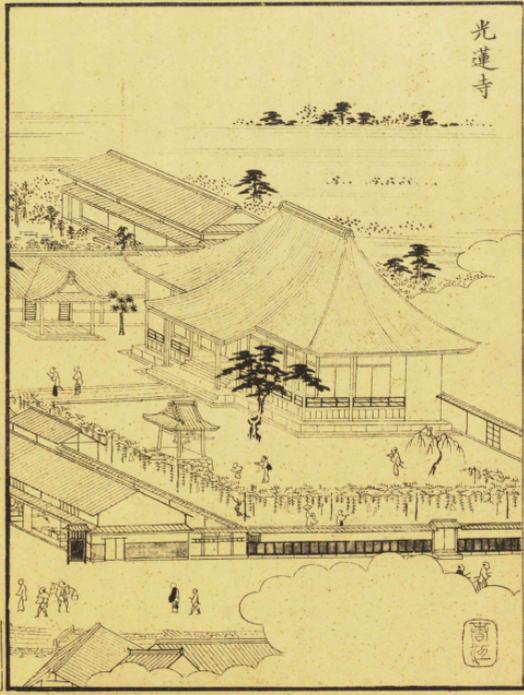
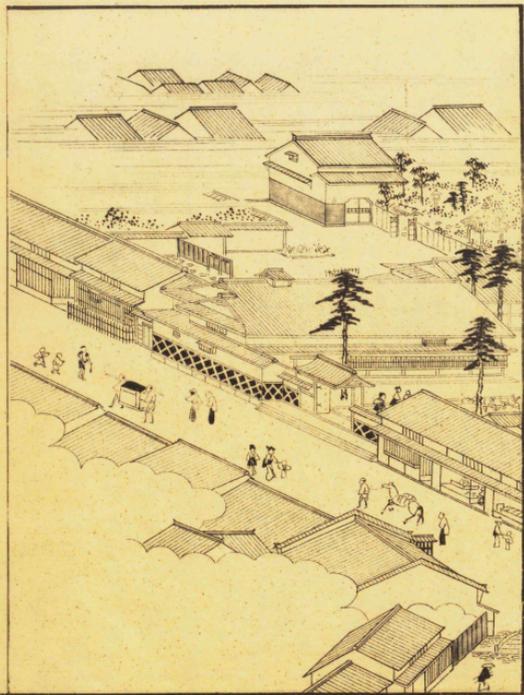
き物とて季瓊日録に文正元西戊閏二月十七日成知客在浦上美作守

所談餘以海苔一葉使石阿拓贈之其題目書曰大唐白樂天成知客云

報之薬花一枚曰天竺迦葉尊者贈大黒云以爲一笑也彼成知客平日好

大黒舞仍如此也と見え御湯とのうの日記に天文十五年三月

九日ちおんいんせにり御中の少年うてと申す



合喧嘩口論 出り或遊君に戯も家職と失ひ身と廢は是民又
 妨げ也として上りの停止せしむ云云と云ふより此時志らく中絶
 寛文に再興すべかり



A294
 才
 [A-3-1]

一七十七

昭和五年九月二十五日印刷
 昭和五年九月二十二日發行
 印刷所 東京 西區 大塚 三軒
 印刷者 東京 西區 大塚 三軒
 發行所 東京 西區 大塚 三軒
 東京 西區 大塚 三軒

愛知 県



1103263663

294

才

1A-3-1